広　石　遺　跡　群

— 広石古墳群Ⅷ群・広石遺跡群Ｅ地点 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第195集

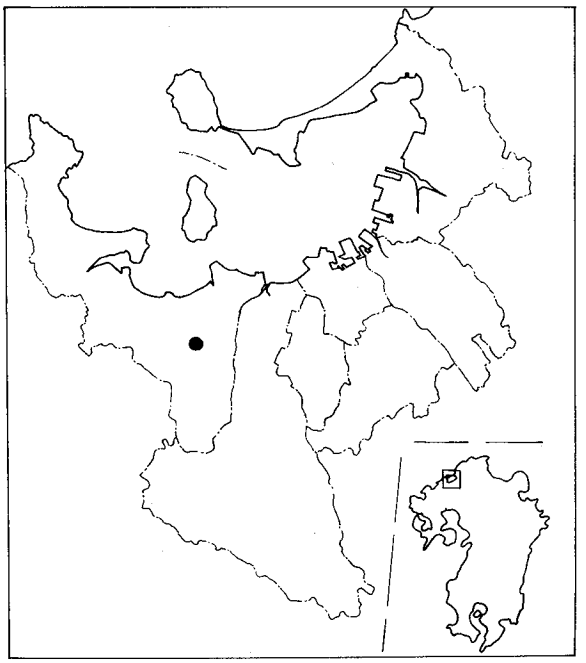
１９８９

福岡市教育委員会

広　石　遺　跡　群

－広石古墳群Ⅷ群・広石遺跡群Ｅ地点－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第195集



１９８９

福岡市教育委員会

序　　文

近年，福岡市域と周辺地域では，諸開発事業によって，数多くの古来の遺跡群についての影響が出て来ています。福岡市教育委員会では，このような開発によって失なわれる遺跡の記録保存調査に努めているところであります。

本書は，野方川河川改修事業にともなって発掘調査を実施した広石遺跡群の調査報告書であります。調査の結果，広石遺跡群は縄文時代から古墳時代の重要な遺跡であることが明らかとなりました。

調査に際しましては，開発各位に御協力をいただきました。これも本市文化財に対する皆様方の深い御理解と考え，深く感謝する次第であります。

平成元年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本書は，福岡市下水道局が計画した野方（のかた）川河川改修事業にともなう事前調査として，福岡市教育委員会埋蔵文化財課が，昭和63年２～３月に実施した広石遺跡群のうち広石（ひろいし）古墳群Ⅷ群と広石遺跡群Ｅ地点の発掘調査の報告である。

2．本書は，Ⅳ-2-b-ⓘⓘを小畑弘己，他を田崎博之が執筆した。

3．本書に使用した図の作成には，田崎，小畑のほか，山口満，古野徳久，清水英嗣，前田尚子があたった。

4．本書の実測図の製図は，小畑，田崎によるものである。

5．本書に使用した写真は，田崎が撮影したものである。

6．本書に使用した方位は，すべて磁北である。

7．本書にかかわる遺物・記録類は，福岡市埋蔵文化財センターで収蔵保管されるので活用されたい。

8．本書の編集は山崎純男の協力をえて，田崎がこれにあたった。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1

1．発掘調査にいたる経過……1

2．発掘調査の組織と構成……1

3．遺跡の立地と環境……2

Ⅱ　調査の経緯と概要……4

1．調査の経緯と方法……4

2．基本層位と検出遺構……6

Ⅲ　調査の記録　1 ―――広石古墳群Ⅷ群1号墳……9

1．遺構……9

2．遺物……18

Ⅳ　調査の記録　2 ―――広石遺跡群E地点……30

1．弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物……30

a）遺構……30

ⓘ石棺墓……30

ⓘⓘ木棺墓……34

ⓘⓘⓘ土壙……36

ⓘⓥピット……39

b）遺物……39

2．縄文時代の遺構と遺物……41

a）遺構……41

ⓘ土壙……41

ⓘⓘピット……45

b）遺物……46

ⓘ縄文土器……46

ⓘⓘ石器……50

Ⅴ　調査のまとめ……51

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布地図　（縮尺　1/50.000）…… 3
Fig. 2　調査地点周辺地形測量図　（縮尺　1/500）…… 5
Fig. 3　調査地点地形測量図および遺構配置図　（縮尺　1/200）…… 7
Fig. 4　遺構配置図　（縮尺　1/200）…… 8
Fig. 5　Ⅷ－１号墳墳丘基底面の状況　（縮尺　1/200）…… 9
Fig. 6　Ⅷ－１号墳石室遺存状況　（縮尺　1/50）…… 10
Fig. 7　Ⅷ－１号墳石室平面　（縮尺　1/50）…… 11
Fig. 8　Ⅷ－１号墳石室床面の敷石の状況　（縮尺　1/50）…… 12
Fig. 9　Ⅷ－１号墳石室基底の状況　（縮尺　1/50）…… 13
Fig.10　Ⅷ－１号墳石室の縦断面　（縮尺　1/50）…… 14
Fig.11　Ⅷ－１号墳石室の横断面１　（縮尺　1/50）…… 15
Fig.12　Ⅷ－１号墳石室の横断面２　（縮尺　1/50）…… 16
Fig.13　Ⅷ－１号墳墳丘の遺存状況（１・２層除去後）　（縮尺　1/200）…… 19
Fig.14　Ⅷ－１号墳出土遺物１　（縮尺　1/3）…… 20
Fig.15　Ⅷ－１号墳出土遺物２　（縮尺　1/3）…… 21
Fig.16　Ⅷ－１号墳出土遺物３　（縮尺　1/3）…… 22
Fig.17　Ⅷ－１号墳出土遺物４　（縮尺　2/3）…… 23
Fig.18　Ⅷ－１号墳出土遺物５　（縮尺　1/1）…… 24
Fig.19　Ⅷ－１号墳出土遺物６　（縮尺　1/2）…… 25
Fig.20　Ⅷ－１号墳出土遺物７　（縮尺　1/3）…… 27
Fig.21　Ⅷ－１号墳出土遺物８　（縮尺　1/3）…… 28
Fig.22　Ⅷ－１号墳玄室の腰石上面の根じめ石の状況　（縮尺　1/50）…… 29
Fig.23　Ｅ地点石棺墓１　（縮尺　1/40）…… 31
Fig.24　Ｅ地点石棺墓２　（縮尺　1/40）…… 32
Fig.25　Ｅ地点石棺墓３　（縮尺　1/40）…… 33
Fig.26　Ｅ地点木棺墓１　（縮尺　1/40）…… 35
Fig.27　Ｅ地点木棺墓２　（縮尺　1/40）…… 36
Fig.28　Ｅ地点土壙・ピット１　（縮尺　1/40）…… 37
Fig.29　Ｅ地点土壙・ピット２　（縮尺　1/40）…… 38
Fig.30　Ｅ地点出土遺物１　（縮尺　1/3）…… 40

Fig.31　E地点土壙・ピット3　（縮尺　1/40）…… 42
Fig.32　E地点土壙・ピット4　（縮尺　1/40）…… 44
Fig.33　E地点土壙・ピット5　（縮尺　1/40）…… 45
Fig.34　E地点出土遺物2　（縮尺　1/3）…… 47
Fig.35　E地点出土遺物3　（縮尺　1/3）…… 48
Fig.36　E地点出土遺物4　（縮尺　2/3）…… 49

図版目次

PL.1　①調査区遠景（調査前，北東から）
②調査区近景（調査前，南西から）
PL.2　①Ⅷ－1号墳の墳丘遺存状況（南西から）
②Ⅷ－1号墳の地山整形面の状況（南西から）
PL.3　①Ⅷ－1号墳の墳丘土層断面（北東から）
②Ⅷ－1号墳の石室1（南西から）
PL.4　①Ⅷ－1号墳の石室2（羨道部から）
②Ⅷ－1号墳の玄室奥壁（玄門部から）
PL.5　①Ⅷ－1号墳の玄室左壁（東から）
②Ⅷ－1号墳の玄室右壁（西から）
PL.6　①Ⅷ－1号墳の玄室玄門部（玄室から）
②Ⅷ－1号墳の前室右壁（西から）
PL.7　①Ⅷ－1号墳の玄室の基底面（前室から）
②Ⅷ－1号墳の前室の基底面（玄室から）
③Ⅷ－1号墳石室（完堀後，北から）
PL.8　①Ⅷ－1号墳玄室左壁の裏込状況（北東から）
②Ⅷ－1号墳玄室右壁の裏込状況（南西から）
③Ⅷ－1号墳玄室奥壁の裏込状況（東から）
④Ⅷ－1号墳墓壙内の供献土器群の出土状況（北から）
⑤Ⅷ－1号墳の周溝土層断面（南西から）
PL.9　①E地点B・C－3～7区の9層上面の状況（北から）
②E地点B・C－6・7区の9層上面の状況（北西から）
PL.10　①E地点SQ－01（北から）

②Ｅ地点SQ－02・03（北から）
③Ｅ地点SQ－04・05・06（北から）
PL.11 ①Ｅ地点SQ－07崖面露出状況（調査前，東から）
②Ｅ地点SQ－07検出状況（東から）
③Ｅ地点SQ－07蓋石除去後の状況（西から）
PL.12 ①Ｅ地点SR－08（北から）
②Ｅ地点SR－09（西から）
③Ｅ地点SR－10（南から）
PL.13 ①Ｅ地点SP－14（南西から）
②Ｅ地点SK－13（北から）
③Ｅ地点SK－15・16・34・35，ＳＰ－14（東から）
PL.14 ①Ｅ地点10層上面の状況（北から）
②Ｅ地点Ｂ・Ｃ－３～７区の遺構（10層上面，南西から）
PL.15 ①Ｅ地点Ｃ・Ｄ－１・２区の遺構（10層上面，北から）
②Ｅ地点Ｂ・Ｃ－５～７区の遺構（10層上面，北西から）
PL.16 ①Ｅ地点遠景（調査完了後，北西から）
②発掘調査参加者一同

付　図　①調査区土層断面図　（縮尺　1/100）
②調査区平面図　（縮尺　1/100）
③Ⅷ群１号墳墳丘土層断面図　（縮尺　1/50）

Ⅰ　はじめに

1．発掘調査にいたる経過

広石遺跡群Ｅ地点および広石古墳群Ⅷ群の調査は，福岡市下水道局計画部河川第２課が計画した野方川河川改修事業にかかわり実施された緊急発掘調査である。野方川河川改修事業は，昭和62年度に完成が予定され，上流部から改修工事に着手された。工事が下流部へ進められる過程で，崖面に露出した石棺と，古墳らしき高まりとが認められた。その地点は，河道の法面にかかり，削りとられる部分にあたる。さっそく，同課は，福岡市教育委員会埋蔵文化財課へ照会を行なった。埋蔵文化財課は係員を派遣し，遺跡であることを確認し，河川第２課と協議にはいった。

協議を重ねた結果，埋蔵文化財課が緊急に発掘調査を実施することとなった。調査担当は，同課主査の山崎純男があたることとなり，昭和63年２月１日から調査を開始した。

2．発掘調査の組織と構成

発掘調査から資料整理，報告書の刊行にいたるまで，多くの人々に協力をうけた。調査地点・所在地・期間と関係者などは，以下のとおりである。

所 在 地　福岡市西区大字野方
遺 跡 名　広石右墳群Ⅷ群（遺跡番号　ＨＩＫ－Ⅷ）
　　広石遺跡群Ｅ地点（遺跡番号　ＨＩＫ－Ｅ）
調査番号　８７５１
調査面積　160㎡
調査期間　1988年２月１日～３月26日
調査委託　福岡市下水道局計画部河川第２課
調査主体　福岡市教育委員会（教育長　佐藤善郎）
調査総括　埋蔵文化財課課長　柳田純孝
　　埋蔵文化財課第一係長　折尾学
調査庶務　埋蔵文化財課第一係　岸田隆
調査担当　埋蔵文化財課主査　山崎純男
　　埋蔵文化財課第一係　大庭康時・小畑弘己（協議）
調査主任　田崎博之
調査協力　山口満・前田尚子・古野徳久（現 香川県教育委員会）・清水英嗣（九州大学）

荒巻八千代・有吉貞江・池弘子・坂本弘・柴田シズノ・柴田タエ子・柴田タツ子・末松克子・末松信子・徳重コマキ・中村千里・藤野ふじ子・野坂康子・松本愛子・三苫ヨシコ・三苫宗登・森友ナカ・古井モモエ

資料整理　城戸トミ子・野村弥生

3．遺跡の立地と環境

広石遺跡群は，福岡市西区大字野方に所在する。今回の調査地点は，昭和50・51年に調査が実施された広石古墳群Ⅰ～Ⅳ群および広石遺跡Ａ・Ｂ地点の東南300ｍほどに位置する。また，西側では，生松台地区土地整理事業にともなって，Ⅴ～Ⅵ群の古墳群とＣ・Ｄ地点の発掘調査が行わっている。調査地点は，西と南西からひろがる２つの谷地形の合流地点にあたり，もともと西からのびてきた細長い丘陵の先端付近にあたる。しかし，調査地点の西側は，すでに切断され，北側と南側も新旧の河川改修により削られ，東西27ｍ，南北７～８ｍの残丘となっていた。標高は27～29ｍをはかる。

遺跡が立地する早良平野の自然・歴史的環境は，すでに他の発掘報告書で，言い尽くされた感がある。ここでは，広石遺跡群の調査の現状を簡単にふれるにとどめる。

まず，遺跡内では縄文時代の遺跡が点々と知られている。Ａ・Ｂ地点で古墳の墳丘盛土などから，押型文土器・夜臼式土器のほか，サヌカイトや黒耀石製の打製石鏃・スクレーパー・石槍が出土している。しかし，明確な遺構にともなうものではない。Ｃ地点では，30基ほどの土壙が確認され，押型文土器や打製石鏃が出土した。また，広石南古墳群でも，古墳の墳丘下で厚さ10cmほどのアカホヤ火山灰が確認され，石器が出土している。こうした縄文時代遺跡は，丘陵の裾にひろがる中位段丘の縁辺に営まれている。ただし，遺跡の内容や遺物は，南区の柏原遺跡群とは異なり，かなり貧弱であると言え，検出された土壙群の性格も明らかではない。今後の課題である。

弥生時代～古墳時代前期の遺跡の分布は早良平野全体に面的にひろがるが，広石遺跡群の中では希薄である。今山産の玄武岩の太型蛤刃石斧など採集されているが，まとまった遺構は，今回調査したＥ地点で，はじめて確認できたにすぎない。地形的な制約のためであろうか。南東0.5～１㎞にある野方中原・野方塚原・野方勧進原・野方柳原遺跡では，同時期の墓地や住居が確認されている。また北東１㎞の宮の前遺跡Ｃ地点１号墳は，大形の石棺墓を中心主体とした低墳丘の古墳である。

古墳時代後期には，早良平野をのぞむ丘陵上に，古墳群が営まれる。しかし，１つの古墳群は，10基以下で構成され，丘陵の尾根にポッリポッリと営まれている。広石古墳群は，Ⅰ群が１基，Ⅱ群が２基，Ⅲ群が３基，Ⅳ群が２基，Ⅴ群が４基，Ⅵ群が５基，Ⅶ群が１基，Ⅷ群が１基で構成されている。

1．広石遺跡E地点およびⅧ－1号墳　2・宮の前遺跡C地点1号墳　3．湯納遺跡　4．野方中原遺跡　5．野方観進原遺跡
6．野方塚原遺跡　7．生松台地区遺跡群　8．有田遺跡　9．藤崎遺跡　10．西新町遺跡

Fig.1　周辺遺跡分布地図　（縮尺1/10,000）

II　調査の経緯と概要

1．調査の経緯と方法

調査地点は，前述したように周辺を削りとられ，残丘となっていた。残丘は西側部分が急に高くなり，側面からは前方後円墳状にみえる（Fig．2，PL．1）。北西側の崖面には石棺墓が露出していたため，当初，これを埋葬主体とする低墳丘墓か，と予想していた。

1988年2月1日から調査にはいったが，安全対策のため，まず北側崖面のオーバーハングした部分を切り落とすこととした。同時に残丘の土層断面観察を行なった。その作業中，東側で石棺墓の棺材と思われる板石を確認したが，崖の下に落としてしまった。また，崖面から，縄文土器の破片を採集し，遺構らしい掘り込み部分を確認した。

つづいて，表土剝ぎ作業を開始したところ，西側で複室構造の横穴式石室を検出した。崖面の土層断面を再度観察した結果，当初，北西側の崖面に露出した石棺にともなうと考えていた調査区西側の高まりは，この石室の墳丘であると判断した。また。東半部の3ヶ所で，石棺墓群が検出され，表土中からは弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出土した。

このように，当初の予想とは異なり，残丘上には，縄文時代～古墳時代の遺構が複合して営まれている可能性がつよくなった。そこで，調査区西半部の古墳を，広石古墳群Ⅷ群1号墳（以下，Ⅷ－1号墳と略称）とし，その墳丘下と東半部にひろがる遺跡を・広石遺跡群E地点と呼ぶこととした。

調査にあたり，横穴式石室の中心点を基準として，4m方眼のグリットを設定した。南北軸は，石室の主軸方向と一致させ，南からA・B・C・Dとした。南北軸は磁北から，24°17′東へふれている。東西軸は西から1・2……とし，両軸を組み合せ，A－1区，A－2区という具合いに調査区画を呼ぶこととした。B区とC区の境界にあたる東西軸には，土層観察用の畦を残して調査を進めた。

検出した遺構には，E地点についてのみ，検出順に通し番号を付した。ただし，ピットの中には，木の根の跡と考えられるものも若干含まれる。出土遺物は，遺構にともなう，ともなわないにかかわらず，確認できる範囲で，9桁の取り上げ番号を付して取り上げた。しかし，1つの取り上げ番号に複数の遺物が含まれていることもあった。その場合には，整理作業の際，別番号を付した。この遺物の取上げ番号は，そのまま，福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管するための遺物登録番号となっている。

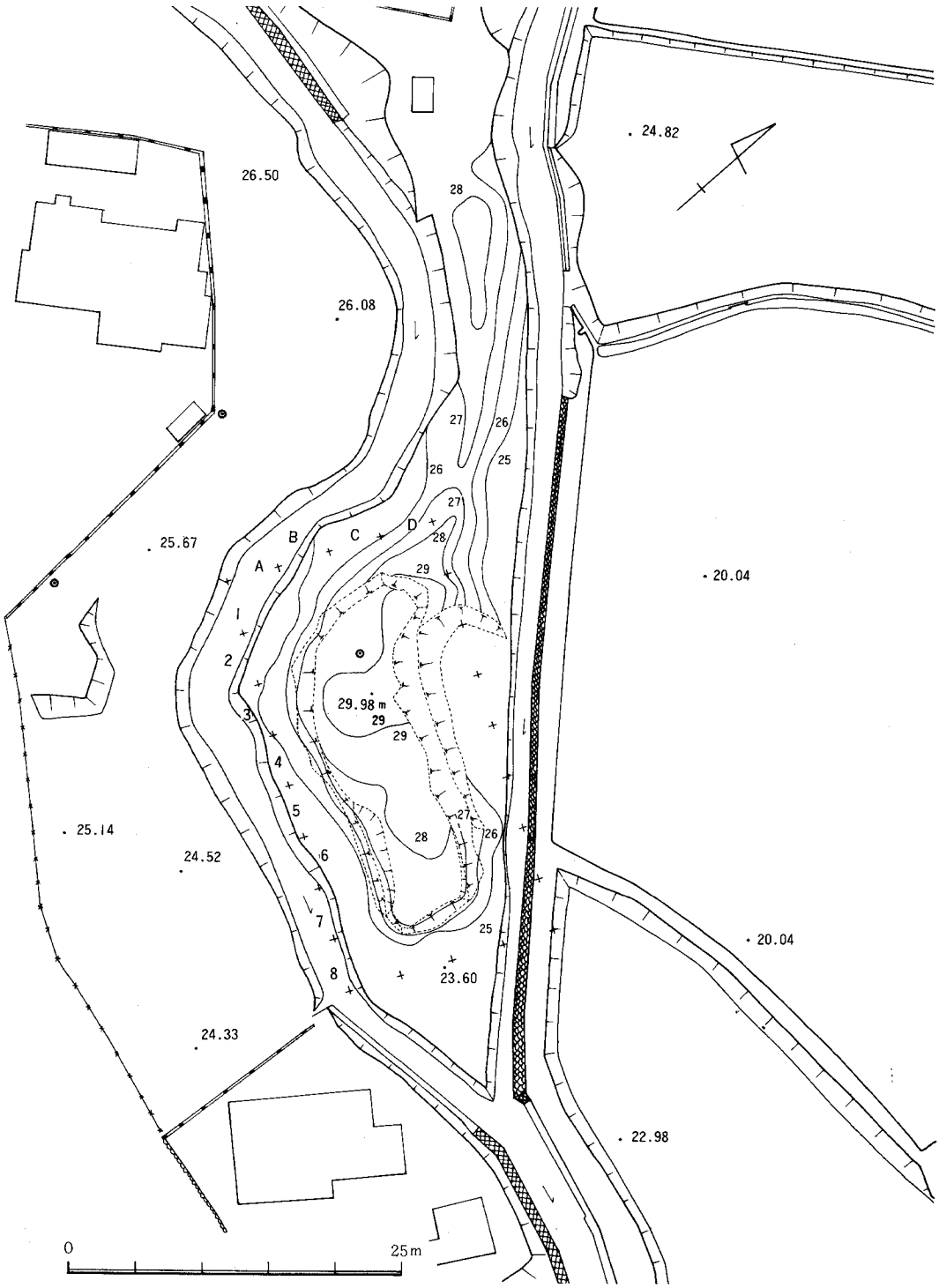


Fig.2 調査地点周辺地形測量図 （縮尺 1/500）

2．基本層位と検出遺構

調査地点の基本的な層位と，検出した遺構との関係を概略する（Fig.３・４，付図①・②）。

層位は，大きく10層に分けることができる。１層は表土層である。ａ・ｂ層に細分できる。上層の１ａ層は，落葉や下ばえが未分解のままの腐植土層である。１ｂ層は，やや赤味をおびた茶褐色の有機質砂質シルト層である。落葉などは完全に分解されている。

２～７層は，Ⅷ－１号墳の墳丘や周溝の埋土などの堆積物で，１～５区のみでみられる。２層は，灰色みをおびた暗黄褐色砂質シルトの２ａ層と，黒色～暗茶褐色の有機質土の２ｂ層とに細別される。前者は小礫や砂を多く含む。Ⅷ－１号墳の東半部の３～４区では，ゆるやかに西へ流されたような状態で堆積している。Ⅷ－１号墳の墳丘と旧表土が流され，２次堆積したものと考えられる。３層は，３～４区のみにみられる。Ⅷ－１号墳の墳丘盛土にあたる。黄色みをおびた褐灰色～黄褐色を呈する。小礫や砂を含む。４層は，Ⅷ－１号墳の周溝の埋土である。５層は，Ⅷ－１号墳の墓壙上面を覆う土層である。３区では，石室の腰石より上面を覆い，石室上半部を構築するための裏込めにあたる。６層は，Ⅷ－１号墳の墓壙の東側テラス部分にみられる黄褐色の砂質シルト層である。下部から，少量の炭化物と供献土器群が出土した。土のしまりは弱い。７層は，Ⅷ－１号墳石室の腰石を固定する裏込めである。細かく分層できたが，基本的には黄褐色砂質シルトと灰褐色砂礫層の互層である。

８～９層は，Ⅷ－１号墳がのる基底面（地山）にあたる。縄文時代早期と，弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が掘り込まれていた。８層は，やや白っぽい黄褐色シルト層である。10～15cmほどの厚さで，３・４区，Ⅷ－１号墳墳丘下のみで確認した。上面で弥生時代後期～古墳時代前期の土壙を検出した。

９層は黄褐色シルト層で，西から東へ緩やかに傾斜しながら堆積している。１～４区では30～80cmと厚いが，５～８区では10～25cmと薄い。５～８区では，９層はかなり流されたり，人工的に削平をうけて薄くなったと考えられる。９層は上下２層に細分できそうであったが，若干上部が汚れているといった程度で，明確に分層できなかった。そのため，９層については，10cmごとに人意的に分層して掘り進めた。９層上部からは，土師器，弥生土器，縄文土器や，サヌカイト，黒耀石の削片，砕片が出土したが，９層の下部は無遺物層である。上面および掘り下げ中に，ＳＱ-07などの石棺墓の墓壙・木棺墓・土壙・ピット，縄文時代早期の土壙・ピットを確認した。

10層は黒灰色ないし黒色の砂礫層である。中位段丘を構成する砂礫層である。この上面まで掘り下げ，遺構の検出に努めた。

以下，本調査で確認した遺構は縄文時代から古墳時代にわたるもので，その内分けは，次のとおりである。

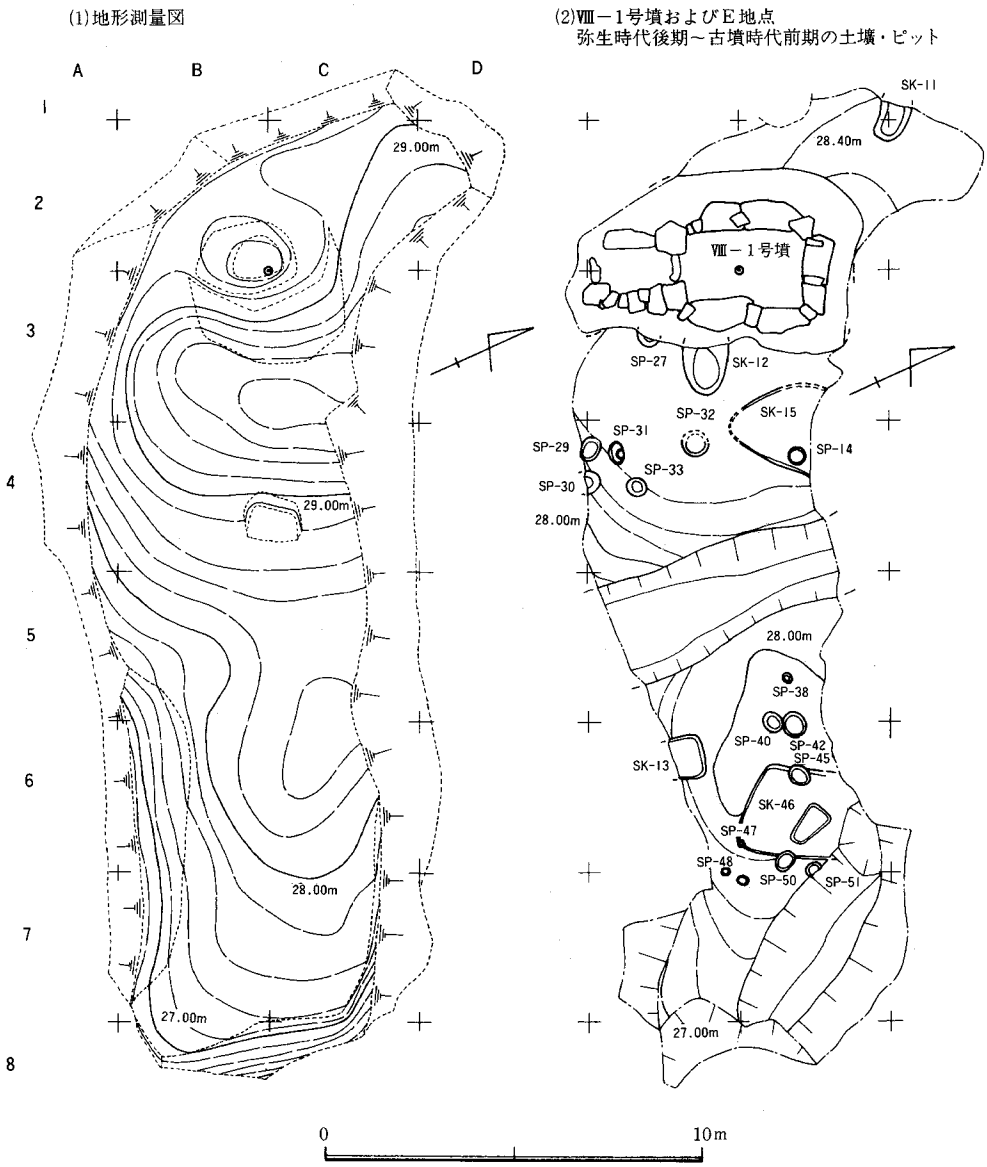


Fig. 3 調査地点地形測量図および遺構配置図(縮尺1/200)

古墳時代後期　古墳１基　Ⅷ－１号墳

弥生時代後期～古墳時代前期

石棺墓	7	E地点	SQ－01～07
木棺墓	3	E地点	SR－08～10
土壙	5	E地点	SK－11～13・15・46

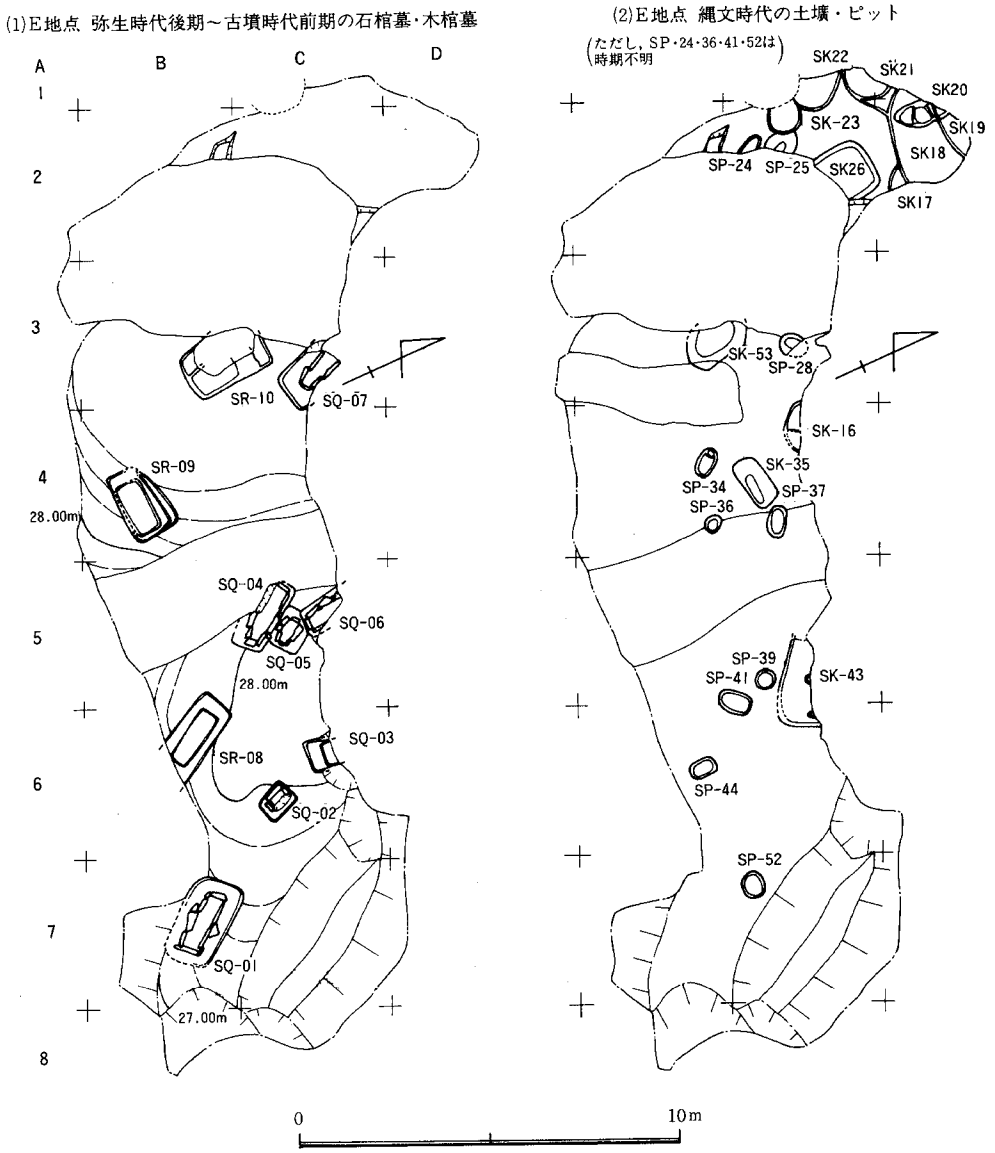


Fig.4 遺構配置図 （縮尺 1/200）

	ピット	16	E地点	SP－14・27・29～33・38・40・42・45・47～51
縄文時代早期	土壙	12	E地点	SK－16～23・26・35・43・53
	ピット	6	E地点	SP－25・28・34・37・39・44
その他	ピット	4		

Ⅲ　調査の記録１―広石古墳群Ⅷ群１号墳

１．遺　　構

本古墳は，もともと，西から東へ緩やかに傾斜する尾根上に営まれていたと考えられる。しかし，石室の東側をのぞき，南・北・西の三方は著しく削られ，墳丘の大部分はすでに失われていた。石室も羨道部分や墓道部分は削り取られ，前室と玄室腰石のみが残る状況であった。Ｂ区とＣ区の境界に残した畦の土層断面を観察した結果，ａ）基底面（地山面）の整形，ｂ）墓壙の掘削，ｃ）埋葬施設の構築，ｄ）墳丘の土盛，の順序で古墳を築造していることが明らかとなった。以下，この築造工程にそって報告を行う。

ａ）基底面の整形

本古墳の築造にともなう基底面（地山面）の整形作業は，墳丘基底面の削り出しと，周溝の堀削からなる。前述したように，古墳周囲の削平が著しかったが，石室東側（３・４区）の遺存状況がよく，基底面の整形のあり方を観察できた（Fig.５，PL.２－②）。

墳丘基低面の削り出し作業は，石室を中心として，８層と９層を高さ0.5～1.2mに削り出している。古墳築造前の旧表土は，完全に除去され，８層もかなり削られたと考えられる。等高線のめぐり方から推定すると，直径が14～16mの範囲を，角が丸い三角錐状に整形したと考えられる。頂部は，ほぼ平坦に削られている。

周溝も長さ６mほどしか残存していなかった。幅２～３m，深さ0.3～0.5mをはかる。９層を掘り抜き，10層まで掘り込んでいる。溝底は北から南へ向かって緩やかに低くなる。残存していた周溝は，古墳の東側部分であたり，旧地形がもっとも低くなった所である。

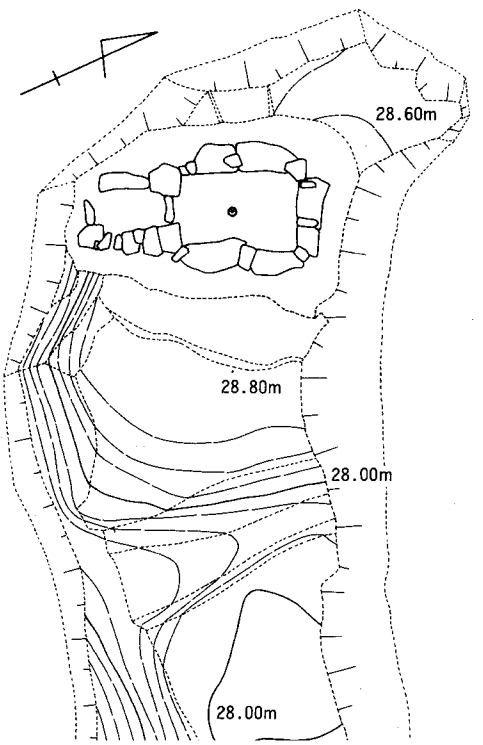


Fig.5　Ⅷ－１号墳墳丘基底面の状況（縮尺1/200）

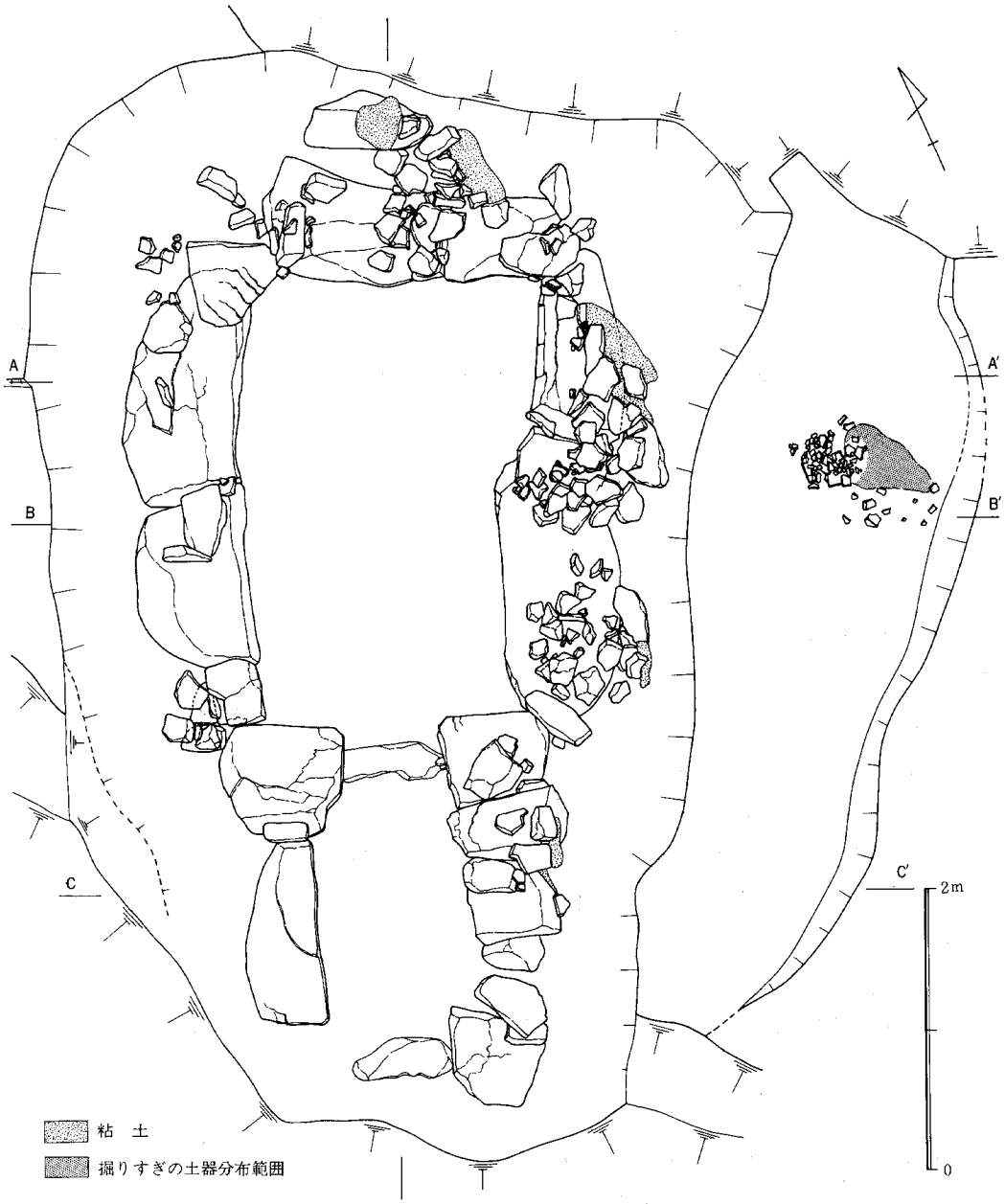


Fig. 6　Ⅷ－１号墳石室遺存状況　（縮尺　1/50）

したがって，周溝は古墳を全周していたと考えてよさそうである。周溝内には，上層に有機質の黒色～暗茶褐色土が推積している。下層は暗黄色褐色のシルト層である（付図③）。下層および溝底付近から，須恵器や土師器が出土した。とくにＢ－５区の周溝中央付近では，須恵器の

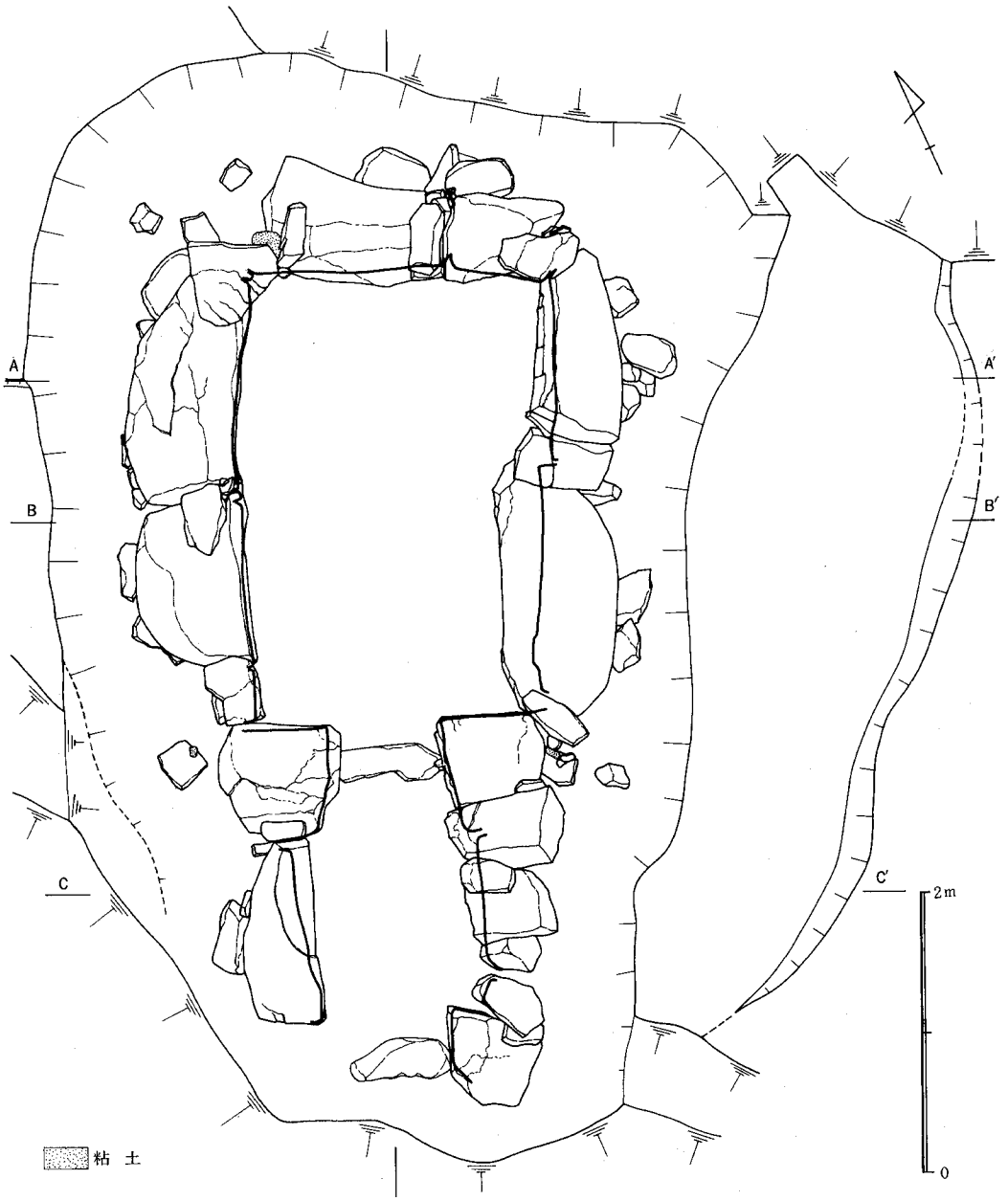


Fig.7 Ⅷ－1号墳石室平面図 （縮尺 1/50）

短頸壺（Fig.16－145）と土師器の甕（Fig.20－136）などが押しつぶされたような状態で出土した。土師器の甕は，後述する石室墓壙内のテラスで出土した破片と接合する。このほか，縄文土器の細片，黒耀石の削片や砕片が少量出土している。

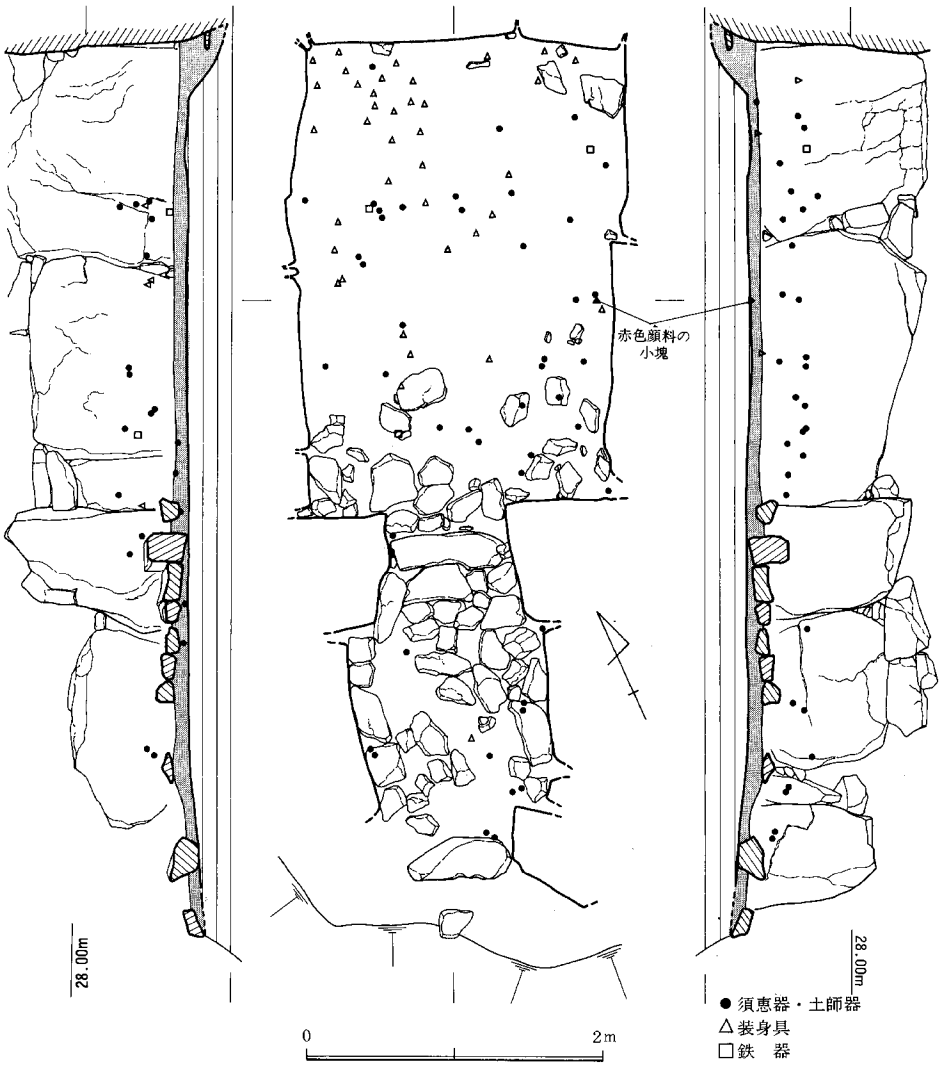


Fig.8　Ⅷ－１号墳石室床面の敷石の状況　（縮尺　1/50）

b）墓壙の掘鑿

墓壙は基低面を整形した後，ほぼ中央に，深さ1.2～1.5mほど掘り込まれている。石室の羨道部にあたる南側部分が切断され，北側部分も若干失われている。平面形は，ほぼ羽子板状を呈し，残存長は約7.9mをはかる。幅は北側が6.5mほどで，南側が推定4.4mと狭くなる。墓壙底は，ほぼ平坦に整えられ，さらに石室の腰石を個定するため，深さ0.2～0.3m・幅1.0～1.4mの溝状の凹みが，墓壙壁にそって掘られている。

墓壙の東側には，幅0.9～2.0m，深さ0.2mほどのテラスをつくっている。北側で短頸壺(Fig.

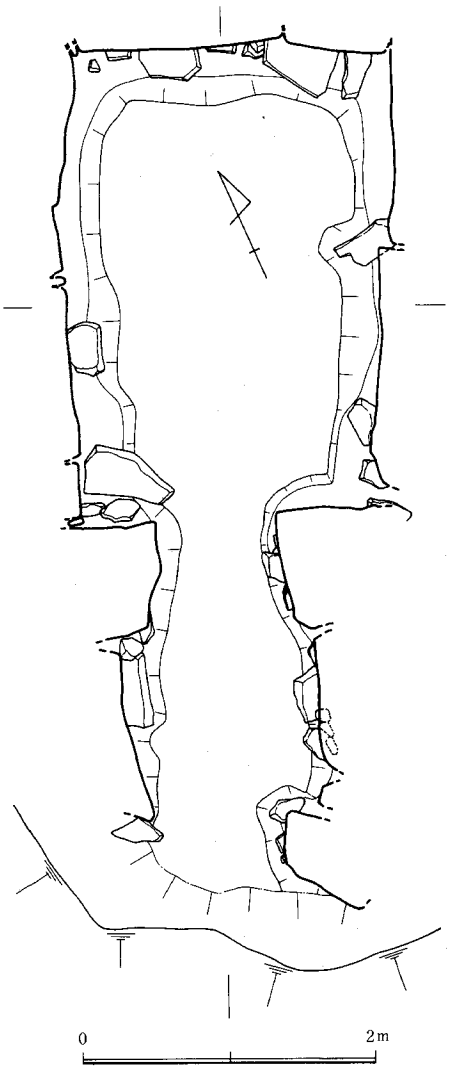


Fig.9 Ⅷ－１号墳石室基底の状況
（縮尺　1/50）

20－133)・大形壺(Fig.20－136,144)・甕(Fig.20－134,135)・鉢(Fig.21－137,138)・高坏(Fig.21－139～142）などが，おしつぶされた状態で集中して出土した。ただし，短頸壺と大型壺の１個は，調査時にテラス床面を掘りすぎたため混入したものと考えられる。また，周辺からは炭化物の小片が出土した。甕と鉢の一部は，周溝底で出土した破片と接合する。古墳築造にともなう祭祀に用いられた土器が，このテラスと周溝に廃棄されたと考えられる。その後，黄褐色砂質シルト（６層）が薄くかけられる。

c）埋葬施設の構築

本古墳の埋葬施設は，玄室－前室－羨道からなる複室構造の横穴式石室である。主軸をＳ－24°17′－Ｗにとり，南南西に開口する。表土層を除去中に検出した。羨道・墓道は，調査地点の南側を流れる用水路の改修時に削り取られていた。石室内に上半部の石材の一部が落ち込んでいたが，天井石を含む大部分の石材は運び去られ，古墳周辺にもみあたらなかった。また，前室の左袖石は崖下に落下していた。石室内は，盗掘を受け，落石のため，床面の敷石の大部分は原位置を保っていない。副葬品も床面～埋土中に散乱した状態で出土している。残存石室長は，左壁で5.32m，右壁で5.72mをはかる。石室を構築した各部の石材は，すべて花崗岩である。

玄室　奥壁幅2.16m，前壁幅2.03m，左壁長3.24m，右壁長3.1mをはかる長方形プランを呈する。

奥壁は幅1.5m×高さ1.56m×厚さ0.4～0.6mと，幅0.86m×高さ1.6m×厚さ0.5～0.6mの２個の大きな転石を配して腰石とする。２枚の腰石間の上方の隙間には，やや扁平な石材を石面をそろえて横積みする。奥壁と両側壁の隅角部には，小さな転石を詰めた後，20cmほどの厚さの扁平な石材を三角持ち送り積みし，側壁とほぼ同じ高さにあわせている。

側壁は，左壁の腰石に奥壁側から大・中・小の転石を配置する。幅×高さ×厚さは，各々1.7×1.54×0.46～0.78m，1.3×1.24×0.56～0.7m，0.38×0.8×0.26～0.36mをはかる。前室側の腰石の上には扁平な石材を積み上げ，他の腰石と高さをあわせている。また，右壁の腰石は，大ぶりの転石を2個用い，内側へ若干傾けて据えている。幅×高さ×厚さは，各々1.5×1.52×0.36～0.58m，1.96×1.4×0.28～0.44mをはかる。腰石間の隙間には，小ぶりの扁平な割石を腰石の傾きにあわせ，持ち送り気味に積み上げる。

玄門部の袖幅は，左袖が0.5m，右袖が0.7mをはかる。袖石は，ほぼ同じ大きさで，角柱状に近い2個の転石をえらび，縦位にたてている。高さ×幅×厚さは，左袖石が1.2×0.76×0.86m，右袖石が1.1×0.76×0.7～0.8

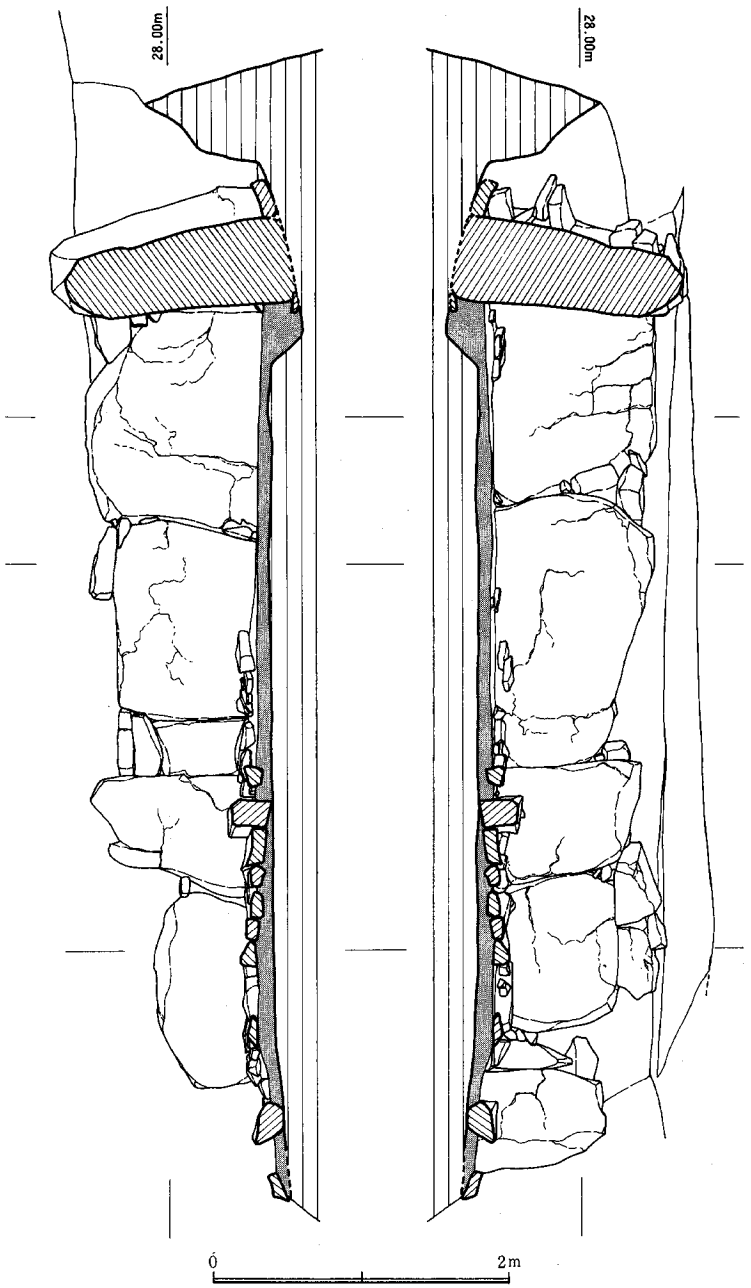


Fig.10 Ⅷ－1号墳石室の縦断面（縮尺 1/50）

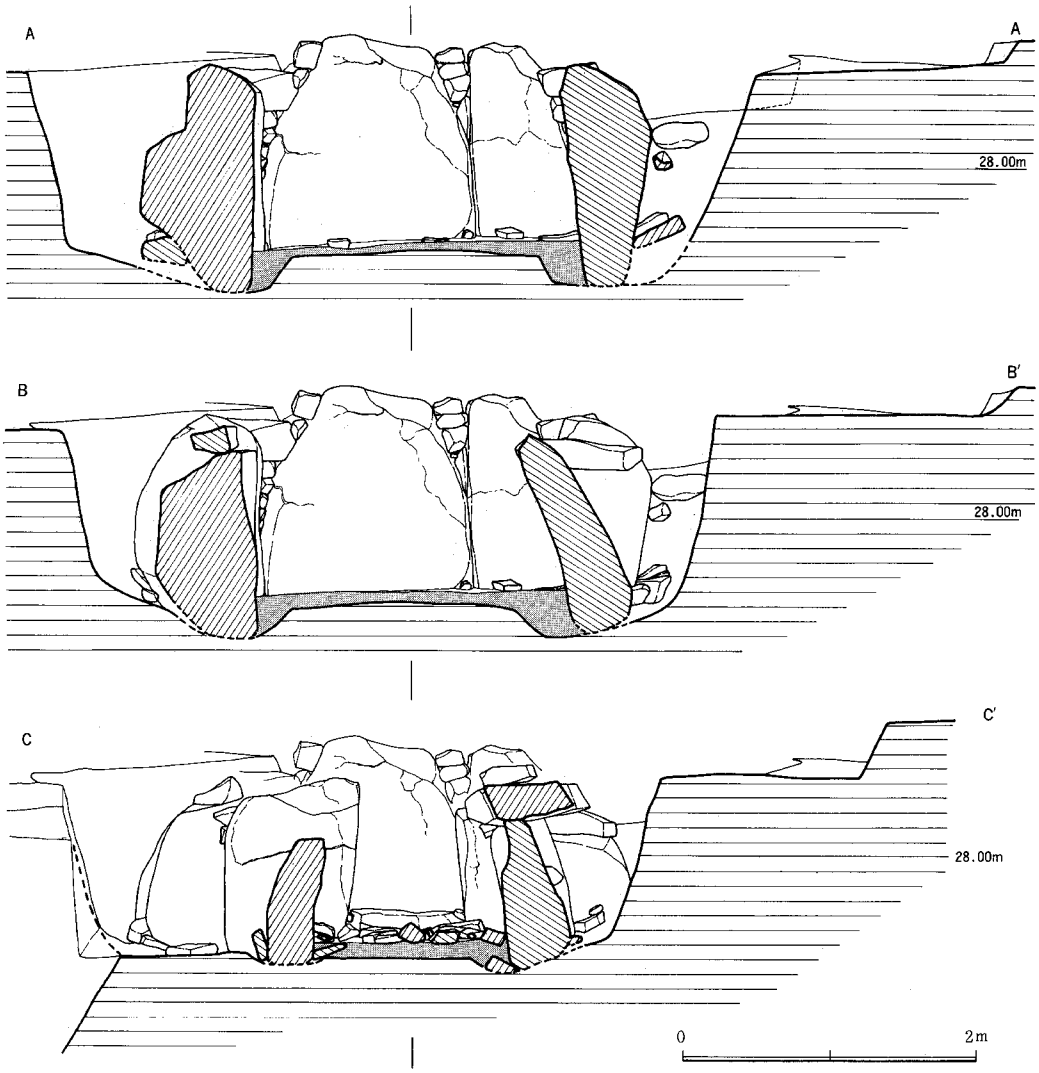


Fig.11 Ⅷ－１号墳石室の横断面①（縮尺 1/50）

mをはかる。玄室の腰石は，墓壙に掘られた溝状の凹みに据えられ，不安定な部分には，割石を詰めて固定させている。とくに，奥壁は，念入りに割石がつめられている。

床面は，黒灰色砂が混じる暗黄褐色砂室シルトで墓壙底から10cmほど埋め，床面を整えている。敷石は全面に施されていたと考えられるが，攪乱が著しいために，玄門付近と奥壁付近の２ヶ所で，部分的にみとめたにすぎない。玄門部分には，長さ0.78m，幅0.2～0.26m，高さ0.26mの石材を梱石として据えている。

副葬品は，かなり散乱した状態で出土したが，ガラスや管玉などの玉類は奥壁前面，耳環は

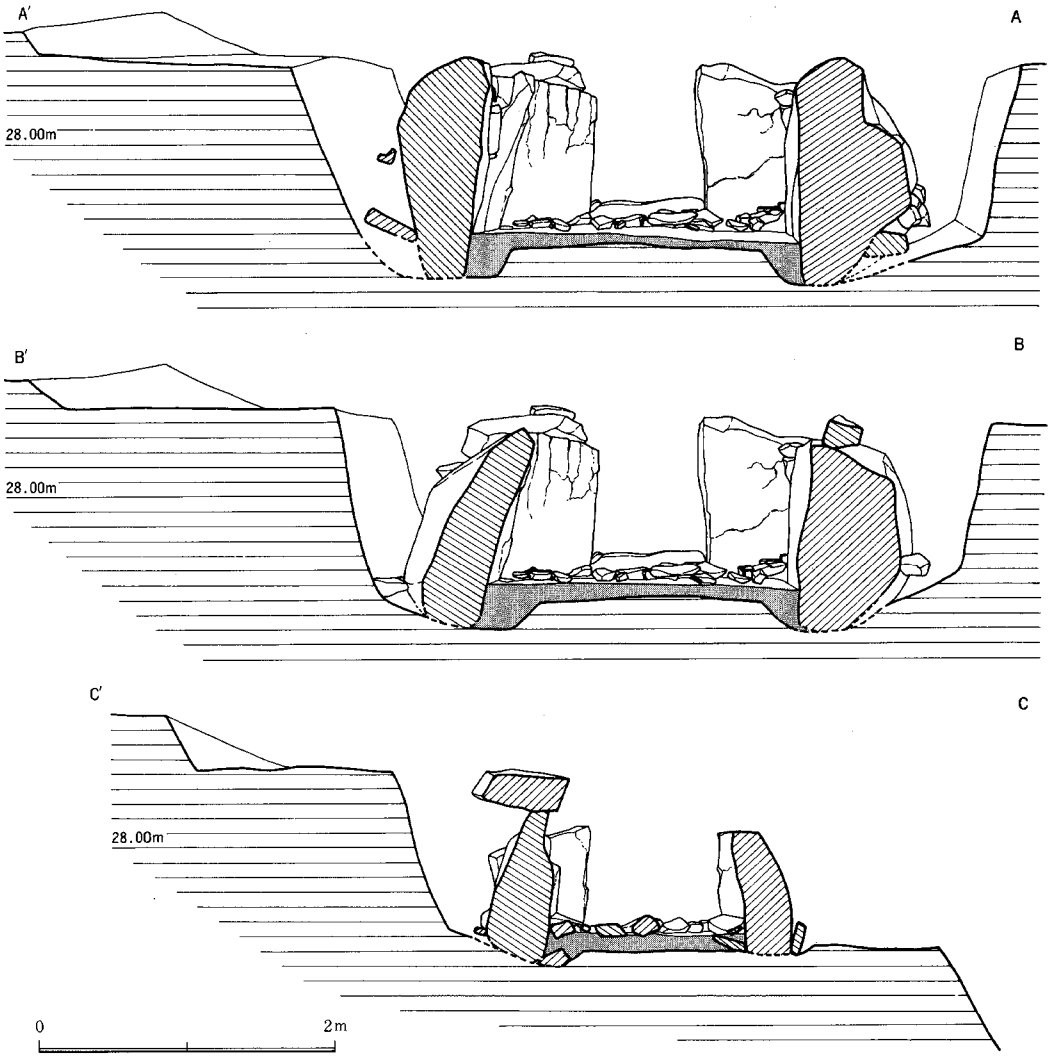


Fig.12 Ⅷ－１号墳石室の横断面２　（縮尺　1/50）

奥壁前面～石室中央部，須恵器や土師器は石室中央部より前面に片寄って出土する傾向がみられた。また，左壁の腰石を固定するために掘られた溝状の凹みから赤色顔料の小塊が出土している。

前室　玄室側で幅1.32m，羨道側で幅1.14m，左壁長1.32m，右壁長1.3mをはかる。ほぼ正方形の平面プランである。左袖石と考えられる角柱状の石材が崖下に落下しており，両袖型の前室であったと考えられる。

左壁は，幅1.32m，高さ0.84m，厚さ0.22～0.32mの１個の大ぶりの転石を，横位に据えて

腰石としている。腰石より上の石材は失われている。右壁は玄室側から大・小の２個の転石を腰石として配している。幅×高さ×厚さは，各々1.1×1.0×0.16～0.44m，1.2×0.6×0.4mをはかる。玄室側の腰石は横位に据えられ，羨道側には袖石に接して小さな腰石がおかれ，両腰石の隙間には，小さめの転石や割石がつめられている。右壁の腰石の上には，厚さ0.2～0.3mの割石が，持ち送りぎみに横積みされている。内傾する腰石を支え固定するために，墓壙底には，溝状の凹みが掘られ，腰石下底に扁平な割石を詰め込んでいる。

玄室との間の袖幅は，左袖が20cm，右袖が10cmをはかる。羨道部との間の袖石は，右袖石のみが残っており，袖幅は，20cmほどをはかる。幅0.4～0.5m，高さ0.8m，厚さ0.5～0.7mの角柱状の自然石を用いている。床面は，玄室と同じく，暗黄褐色の砂質シルトを墓壙底から5～10cmほど貼り，敷石を敷いている。梱石は，若干動いた状態であるが，右袖石に，ほぼ接して検出された。

出土遺物は攪乱され，原位置を保っていない。須恵器・土師器がほとんどで，他は中央部付近でガラス小玉が１点のみ出土したにすぎない。

石室の裏込め状況　石室の裏込み作業は，腰石を固定するための裏込め作業と，腰石より上の石室上半部の構築にともなう裏込め作業の二工程に分けられる。

腰石の裏込め作業は，左壁では，さらに２つの段階に分けられる。墓壙底の傾斜にそって，まず，黄褐色シルトをかたくつきかため，さらに灰褐色砂礫，黒灰色砂礫，黄褐色シルトと黒灰色砂礫を混ぜた土を，交互に厚さ30cm程につきたかめる。第２段階として，黄褐色シルトをつめ込み，墓壙の1／4ほどを残し腰石を固定してしまう。

右壁では，４段階に分けられている。まず，10層の黒灰色砂礫層を墓壙底から20cmほど一気につき固める。次に，腰石に暗褐色の砂質シルトをかけ，黒灰色の砂礫を含む暗褐色砂質シルトをつめ込む。さらに，黄褐色シルトと灰褐色砂礫を交互につきかためる。最後に再び腰石に暗黄褐色砂質シルトをかぶせ，黄褐色シルトと灰褐色がかった暗黄褐色砂質シルトを交互につめ込み，左壁と同じく墓壙を3／4ほど埋めて，腰石を固定させる。

奥壁の裏込め作業は，５段階に分けられる。まず，腰石の下底に根石をつめ，簡単に固定した後，一気に10層の黒灰色砂礫を入れ，厚さ35～45cmにつきかためる。次に，小礫を含む暗黄褐色砂質シルトを５cm～10cmずつ埋めていき，厚さ20cmほどにする。さらに，同様に黒灰色砂礫と黄褐色シルトを交互にいれて裏込め作業を進める。最終的に腰石の頂部付近まで埋めてしまう。側壁の裏込めとくらべ，かなり念入りな版築が行われている。

石室上半部を構築するための裏込めの作業は，石室東側（３区）で観察できた（Fig. 6・22)。まず，腰石の頂部の付近に，直径10～30cm，大きなものでは70～80cmの転石や割石をおき，根じめを施す。不安定な時には，下部に青灰色の粘土をつめてる。とくに，腰石の連接部分には，丹念に根じめを施している。次に，10～20cmずつ黄褐色シルトや暗黄褐色砂質シルトをか

け，墓壙を完全に埋めてしまう。土層断面を観察すると，土層が石室にむかって緩やかに高くなっている。石室の天井部付近まで，こうした作業が行われたと考えられる。腰石の裏込めとくらべ，しまりは悪い。

縄文土器，黒耀石やサヌカイトの削片・破片が少量出土した。

d）墳丘の土盛

埋葬施設を構築した後，墳丘の土盛り作業が行われ，古墳が完成される。墳丘はほとんど失われていたが，石室の東側（3．4区）で，その土盛作業の状況を観察することができた（Fig.13・付図③）。

墳丘の土盛り作業は，墳丘の土層断面から大きく2段階に分けることができる。まず，石室を中心として，ほぼ水平に黄褐色シルトを盛っていく。盛土の中には礫や小石が多く入れられる。残存高0.6mをはかる。盛土の芯の部分にあたる。

次に，この周縁に黄色みのつよい褐灰色砂質シルトが盛られる。盛土の芯部分にかぶせるように盛られている。最後に，砂礫を多く含む褐灰色砂質シルトで墳丘の形が整えられる。

盛土の範囲は明確ではない。墳丘基底の整形面の傾斜角度からいうと，石室を中心とした直径10mほどの範囲にだけ，盛土が施された可能性がつよい。

2．遺　　物

本古墳にともなう遺物は，盗掘や落石のために，いずれも原位置を保っていない。a）副葬品と考えられる石室出土の遺物，b）墓壙や周溝から出土した古墳築造にともなう祭祀関係の遺物，c）表採，その他の遺物に分けられる。本古墳から出土した遺物は次のとおりである。

a）石室出土の遺物

容器	土師器・須恵器
装身具	耳環・ソロバン玉・勾玉・小玉・管玉
農工具	鉄製鋤先・鉄刀子
武器	鉄刀・鉄鐔・鉄鏃
馬具	引手ほか

b）墓壙および周溝出土の遺物

容器	土師器・須恵器

c）表採その他の遺物

容器	土師器・須恵器

その他，縄文時代の遺物が，墳丘・周溝・墓壙内から出土している。これについては，Ⅳ－

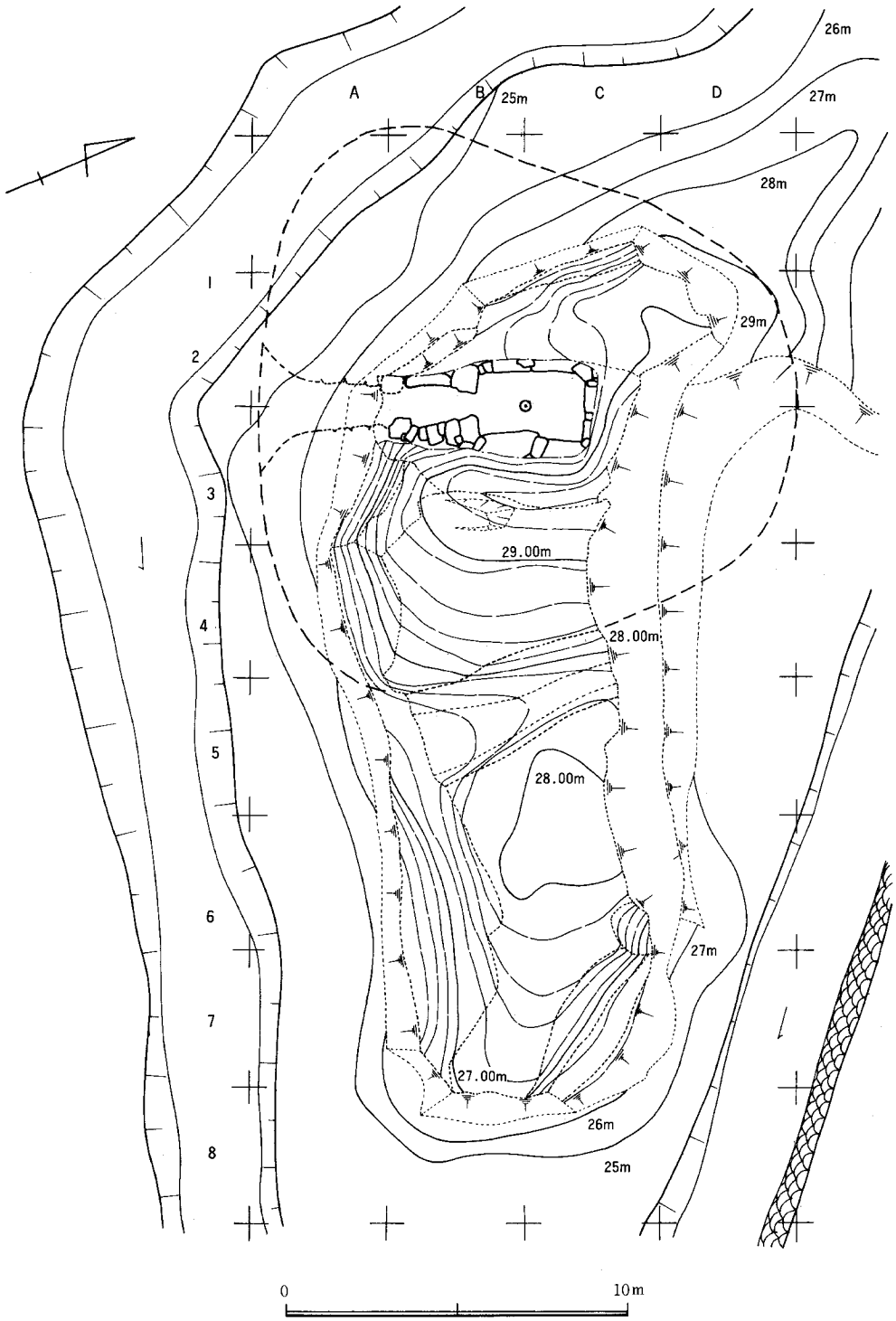


Fig.13 Ⅷ－１号墳墳丘の遺存状況（1･2層除去後）（縮尺　1/200）

2－b）で一括して報告する。

a）石室出土の遺物

容　器

土師器（Fig.14－1～3）

鉢と高坏がある。1は直口縁の鉢で，胴部下半以下を手持ちでヘラケズリし，上半部～内面は横ナデあるいは丁寧なナデ仕上げを施す。2は口縁部が内彎しながら折れる鉢である。1と同様に，胴部下半をヘラケズリするが，全体につくりは丁寧である。口縁部付近は横位，内面は渦巻き状にミガキを施す。微細砂粒を多く含むが，粘土自体は精良である。暗赤茶色～茶褐色を呈する。3は高坏の脚裾部の破片である。外面は縦位，脚端部は横位のミガキを施し，内面は横ナデで仕上げられる。1は玄室，2・3は前室から出土。

須恵器

坏・高坏・蓋・提瓶・平瓶・瑞・壺などがある。ほとんどが細片であるが、坏がもっとも多く出土している。

坏蓋（Fig.15－4～13）　口径が10～12cmの小形品と，15～17cmの大形品とに分けられる。小形品は，口縁端の内側に小さな段をめぐらす4・5と，段をめぐらさず尖り気味に仕上げた6とがある。6の外面には天井部近くに凹線がめぐる。大形品のうち7は段状の凹線，9は凹線をめぐらす。また，8・9の口縁端の内面には小さな段がめぐる。いずれも，外面上半部は回転切り離しのままで，口縁部付近は横ナデ，内面は横ナデもしくはナデを施す。4は破片となり前室と玄室の敷石間から出土。6は玄室，5・7・9は前室の敷石間あるいは攪乱土中から出土した。8は石室前面の崖面の表土層から出土。後世に，石室内から投げ捨てられたものか。

坏身（Fig.15－10～13）　坏蓋の大形・小形品に対応する2者がある。10・11は，口径が11cmほどの小形品である。11は10とくらべ，身が深く，口縁受け部が立ち上る。12・13は口径が12cm前後の大形品である。いずれも，体部下半は回転切り離ししたままで，内底部は横ナデの後にナデ仕上げを施す。10・11は玄室，12・13は前室から出土した。

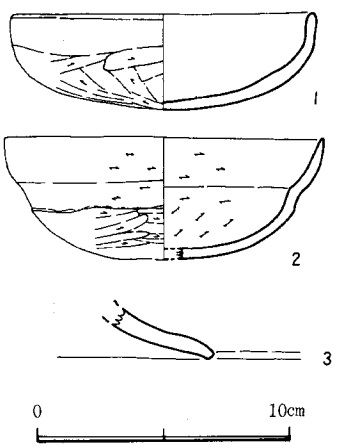


Fig.14　Ⅷ－1号墳出土遺物1
（縮尺　1/3）

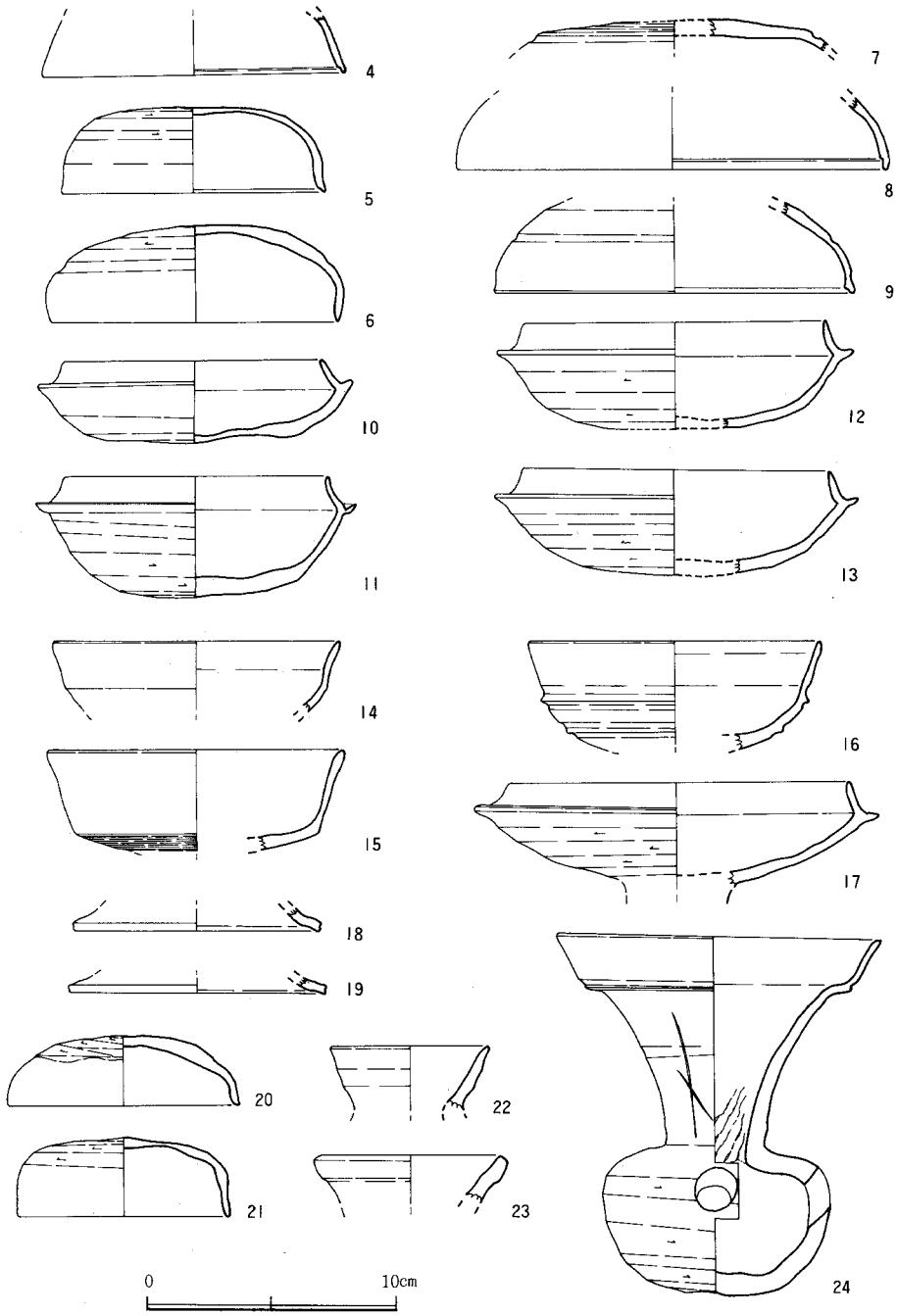


Fig.15 Ⅷ－１号墳出土遺物２ （縮尺 1/3）

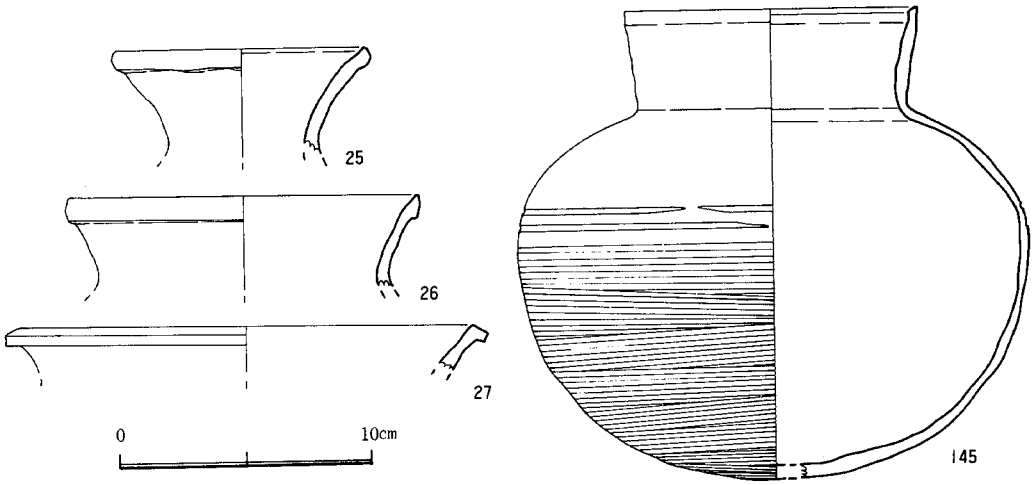


Fig.16 Ⅷ－1号墳出土遺物3 （縮尺 1/3）

高坏（Fig.15－14～19） 14～16は無蓋の高坏である。14は坏の中位がわずかに屈曲し反転する。全体に丸みをおびた坏部である。15は坏部がやや内彎しながら立ちあがるものである。下半部にはカキメを施す。16は全体に丸みをおびた坏部であるが，下半部に三角突帯状のつまみ出しがめぐる。17は有蓋の高坏である。下半部は回転ヘラケズリされ，口縁部付近～内面は横ナデもしくはナデ仕上げされる。18・19は高坏の脚裾部の破片である。脚端部付近を強く横ナデする。無蓋の高坏の脚であろうか。14・18は玄室，15～17・19は前室から出土した。

蓋（Fig.15－20・21） 口径9㎝前後，器高3㎝ほどの小形品である。20は丸みをおびる体部をもち，天井部近くに不明瞭な段がめぐる。21は口縁部が立ち上がり，全体に角ばった形状である。ともに外面を回転切り離ししたままで，口縁部付近は横ナデ，天井部はナデ仕上げする。ともに玄室から出土。

平瓶・提瓶（Fig.15－22・23） 22は口縁端部を尖り気味に仕上げ，急激に壁厚を増す。平瓶の口縁部か。玄室から出土。23は口縁を肥厚させ，口縁部内面がつよい横ナデのためにずかに凹む。提瓶の口縁部か。前室から出土した。

瑞（Fig.15－24） 口縁部の一部を欠くが，ほぼ完形のものである。口頸部は横ナデ，胴部外面は回転ヘラケズリが施されている。また，頸部内面には，しぼり痕跡が認められる。肩部には焼成前に一孔が穿たれている。玄室の右壁と右袖石との連接部の床面から出土した。

壺（Fig.16－25～27） 25は口縁をわずかに肥厚させ，口頸部がラッパ形にひらく壺の破片である。内外面ともに横ナデを施すが，口縁端部の内面は強い横ナデしたためか若干凹む。26も口縁部を折り曲げ肥厚させている。球形の胴部がつく短頸の壺と考えられる。27は口縁端部を外方へ折り曲るもので，大形の壺であろうか。いずれも前室から出土した。

このほか，図化しなかったが，大形壺の胴部破片が出土している。外面には細かな斜格子や平行条線，内面には同心円文のタタキが残る。

装身具

耳環（Fig.17－28～33、197）　7点出土しているが，うち遺存状態のよい6点を図示している。28・29は細身の耳環である。図示していない1点も細身のものである。30～33は太身で，やや大形の耳環である。33の連接部の隙間には，スポンジ状のものが挟まっていたが，材質は不明。いずれも玄室から出土している。

管玉（Fig.17・34～43）　玄室から10点出土した。34・35は細身で，長さ1㎝前後の碧玉製の管玉である。ともに石質は非常によく，光沢をもつ。34は明青緑色，35は濃青緑色を呈する。36・37は細身であるが，長さが1.5㎝とやや長めの碧玉製の管玉である。表面はかなり風化が進んでいる。ともに青緑色を呈する。38～43は，直径が0.6～0.9㎝，長さ1.9～2.2㎝の太身のものである。38・40は水晶製，43は瑪瑙製，他は碧玉製で黒みをおびた青緑色を呈する。いずれも両面から穿孔が施されている。

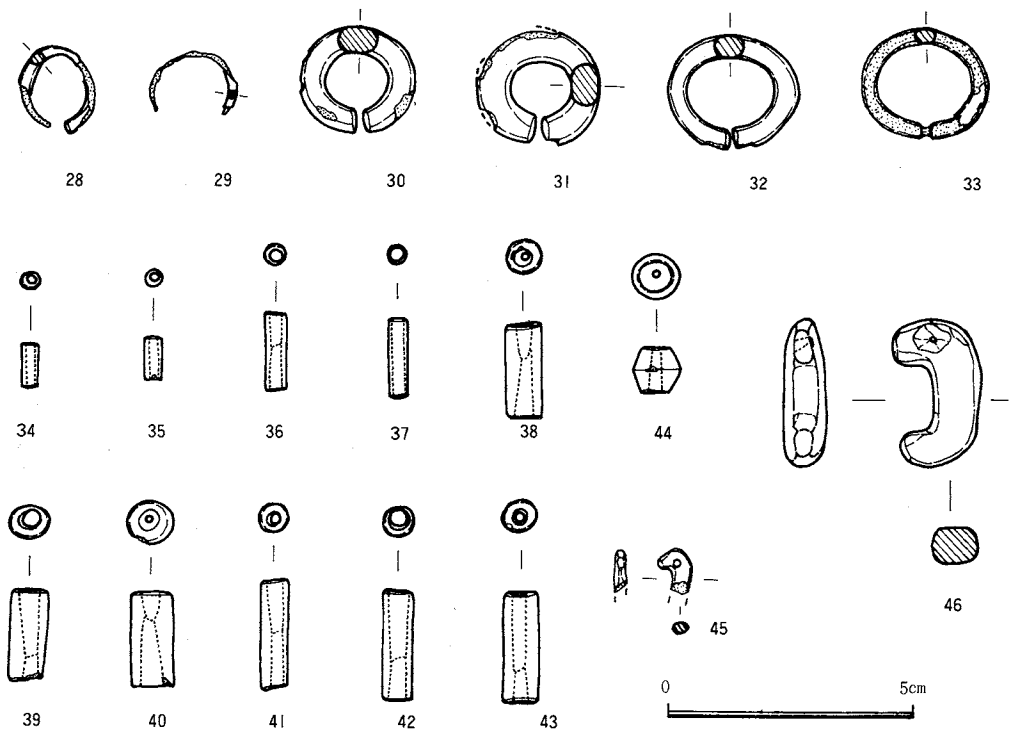


Fig.17　Ⅷ－1号墳出土遺物4　（縮尺　2/3）

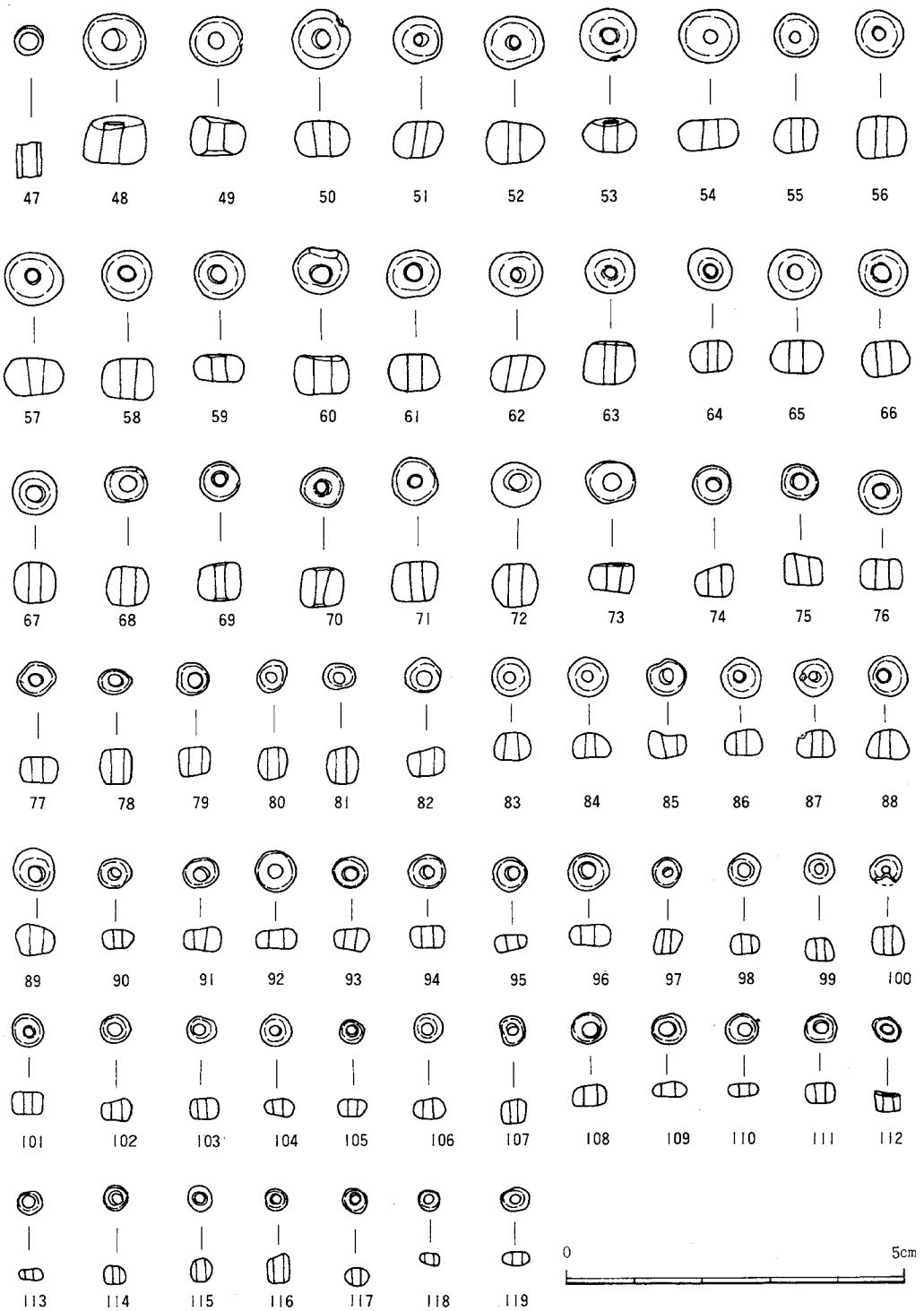


Fig.18 Ⅷ－１号墳出出土遺物５　（縮尺　1/1）

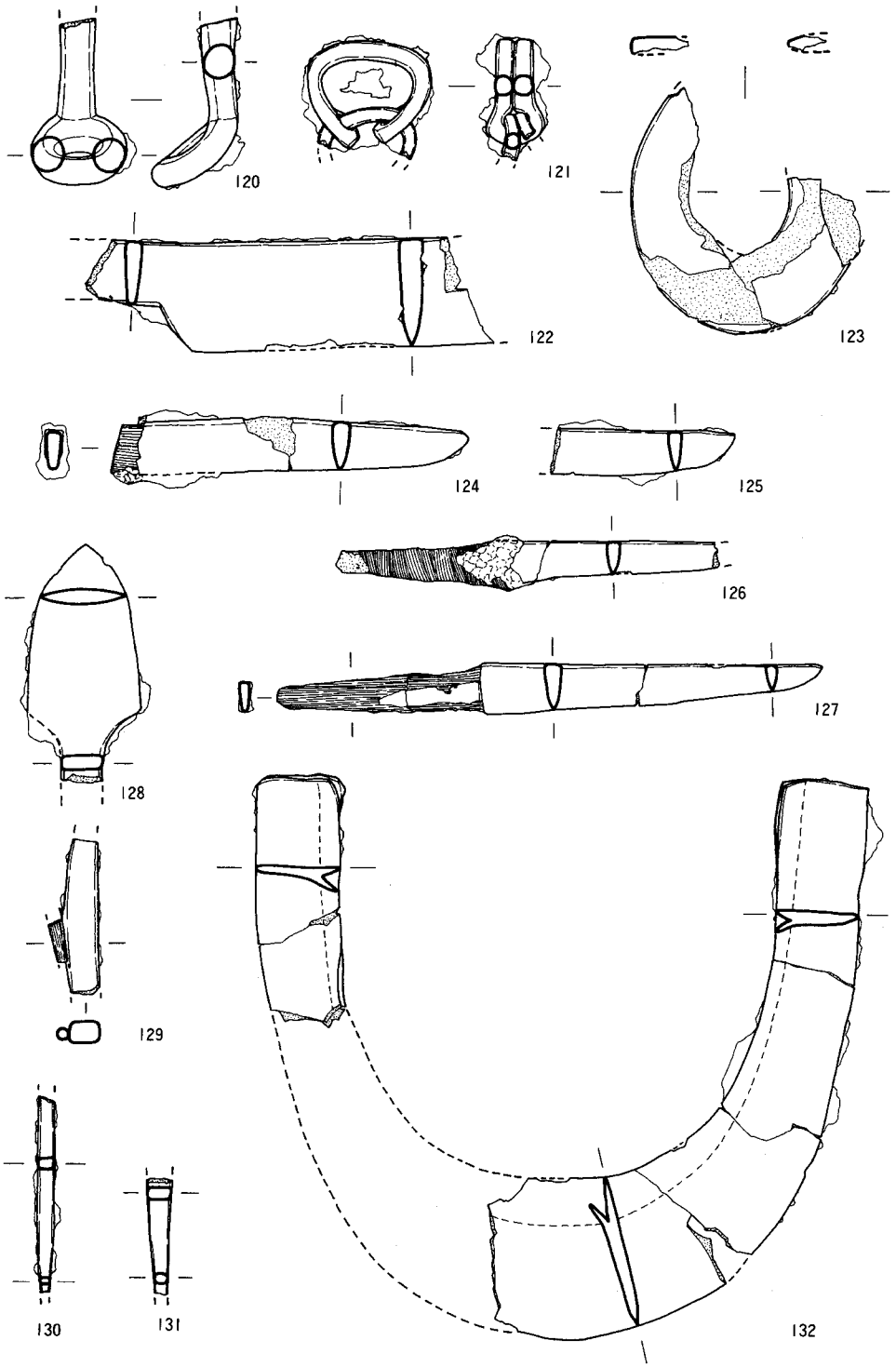


Fig.19 Ⅷ－１号墳出土遺物６ （縮尺 1/2）

ソロバン玉（Fig.17－44）　1点のみが玄室から出土した。直径0.95cm，高さ0.9cmをはかる。水晶でつくられているが，石質は悪く，ヒビや変色部がみられる。穿孔は片面から施されている。

勾玉（Fig.17－45・46）　2点出土している。45は碧玉製で，尾部を欠く。石質はかなり悪く，白っぽい濃青緑色を呈する。46は瑪瑙製で，長さ3cm，厚さ0.9cmをはかる。穿孔は一方から施し，反対側の開孔部付近をあらく削りおとして貫通させている。淡い茶褐色を呈する。

小玉（Fig.18－47～119）　計96点が出土した。47は淡緑青色の管状のガラス玉である。48～119はガラス小玉で，76は黄色，48～75，77～119はスカイブルーないしコバルトブルーを呈する。1個をのぞき，玄室の奥壁前面付近に集中して出土した。

農工具

鉄製鋤先（Fig.19－132）　1点のみ玄室から出土した。U字形鋤先で，推定長16cm，幅17.4cmの鍛造品である。

鉄刀子（Fig.19　124～127）　4点出土している。124・125は厚手の刃身をもち，莖部には木質が付着している。126は刃幅が狭い。莖部に巻き付けられた木質が残る。127は完形のもので，全長15.6cmをはかる。莖部には木質が付着している。124は前室と墳丘流土（2層）から出土した破片が接合。125～127は玄室から出土した。

武　器

鉄刀（Fig.19－122）　1点のみ出土した。残存長11.7cm，刀幅3.1cm，背幅0.7cmをはかる。

鉄鐔（Fig.19－123）玄室から1点出土した。表面の剥離が著しい。身幅は一定しておらず，厚さは.0.5～0.6cmほどと考えられる。

鉄鏃（Fig.19，128～131）　いずれも小片であり，玄室から出土している。莖部の破片は10点ほどあるが，身部の破片は，図示した1点のみである。

馬　具

引手（Fig.19－120）　1点出土している。引手の壺部分である。残存長4.8cm，壺の環状部の直径0.9cmをはかる。

不明馬具（Fig.19－121）　玄室から出土した。2条線造りのもので，鎖繋の一種か。

b）墓壙および周溝出土の遺物

容器として土師器と須恵器がある。墓壙内の東側テラス上から出土したものと，周溝の底溝付近から出土したものとがある。両者の破片が接合することが多いので，一括して報告する。ただし，墓壙内のテラス出土の遺物には床面を部分的に掘りすぎたため，下層の古墳時代前期のものが混じっている。

容器

土師器

壺（Fig.20－133・Fig.21－143・144）

133はほぼ直立する口頸部をもつ短頸壺である。扁球形の胴部がつく。口縁部付近は横ナデ，胴部外面はハケメの後にミガキを施す。肩部付近にハケメが部分的に残る。細砂粒を少量含み，淡黄褐色を呈する。墓壙内のテラス上から出土。古墳時代前期のものか。143・144は壺胴部破片と考えられる。133と同じく，下層の遺構にともなうものか。

甕（Fig.20－134～136）　134と135は同一個体と考えられる。下ぶくらみの胴部に「く」の字形に曲げた口縁部がつく。胴部内面には乱雑にヘラケズリ，外面にはあらにハケメを施す。周溝溝底から出土した。136は丸みをおびた胴部に，立ち上がりの強い「く」の字形口縁がつく。胴部内面は乱雑なヘラケズリ，

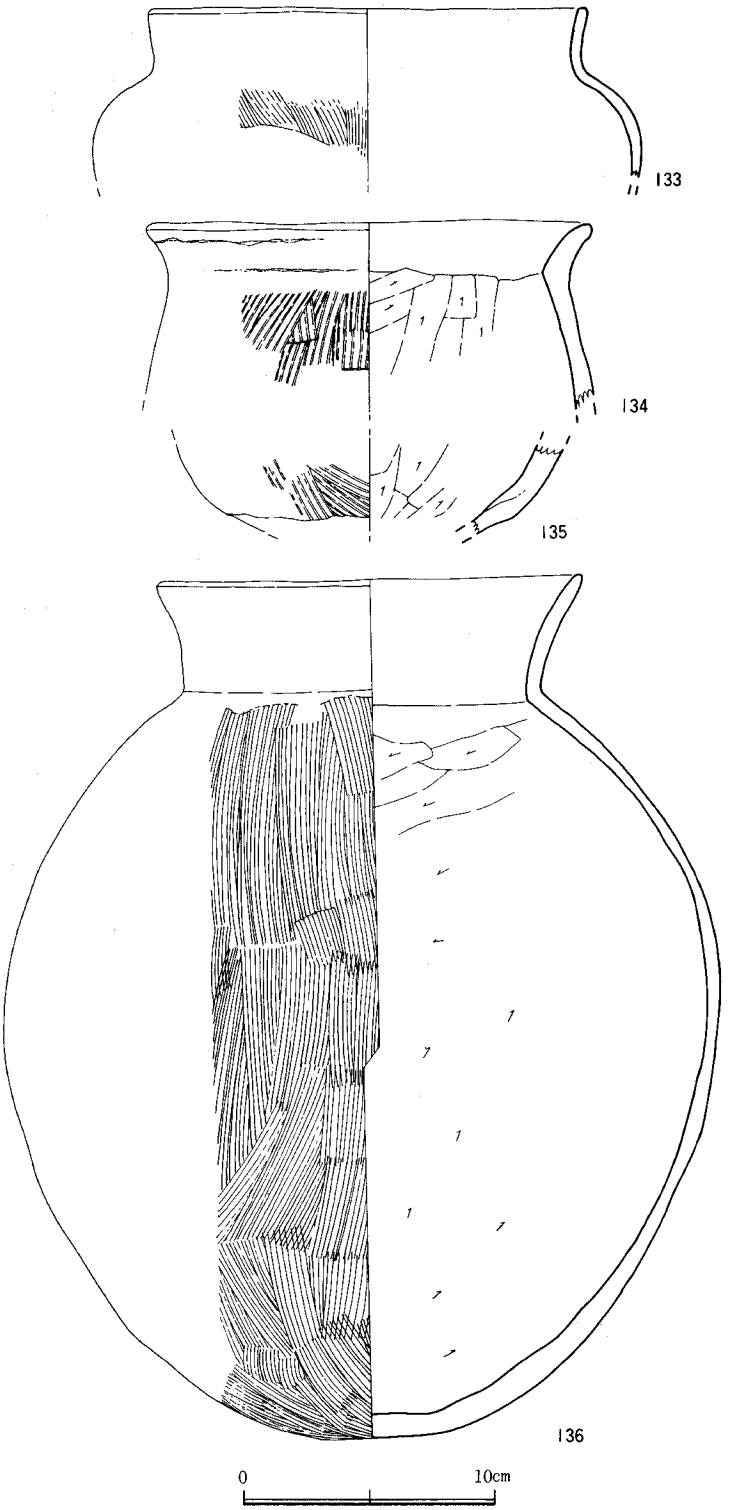


Fig.20　Ⅷ－1号墳出土遺物7　（縮尺　1/3）

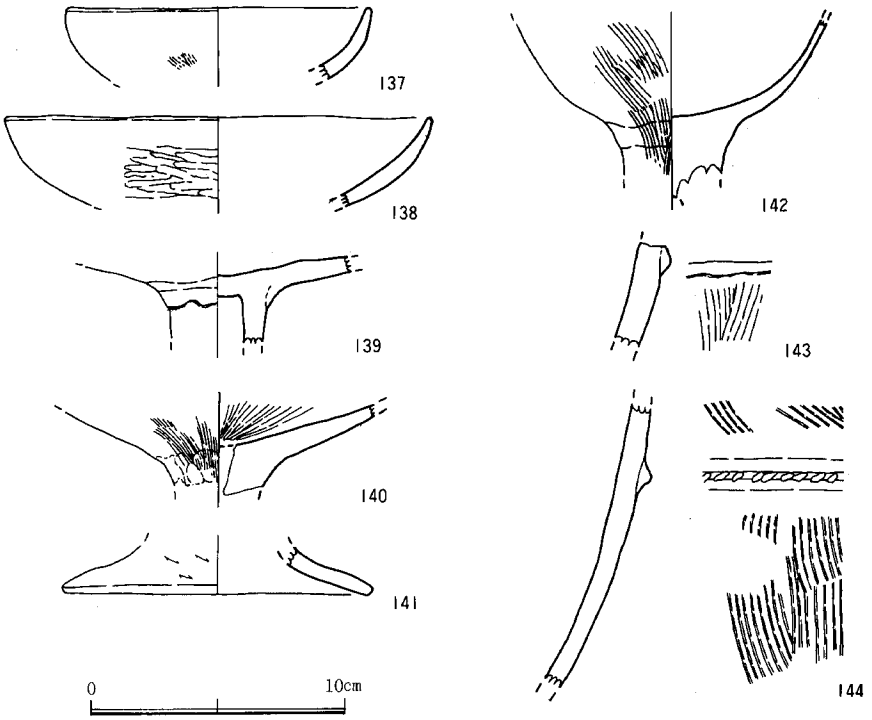


Fig.21　Ⅷ－１号墳出土遺物８　（縮尺　1/3）

外面にはハケメを施す。墓構内のテラス上で，押しつぶされた状況で出土。破片の一部は134・135とともに周溝溝底から出土した。

鉢（Fig.21－137・138）　２点あるが，ともに直口縁の鉢である。137は器面のあれが著しく，部分的にハケメが残るのみである。138は，内外面ともにミガキを施すが，胴部下半のミガキは乱雑である。両者の破片には，134・135とともに周溝溝底から出土したものと，136と一緒に墓壙内のテラス上から出土したものとがあり接合した。

高坏（Fig.21－139～141）　139は周溝内から出土。器面のあれが著しく，調整の仔細は不明。140・141は136とともに墓構内のテラスから出土した。140は外面をハケメ調整した後に，ナデを施す。壙部内面には放射状に暗文が見られる。141は脚裾部の破片である。内外ともに横方向あるいは斜方向のミガキで仕上げる。

脚付椀（Fig.21－142）　坏部内面は丁寧にナデ仕上げするが，外面はかなり乱雑なハケメ調整のままである。明茶赤色を呈し，胎土には砂粒をほとんど含まない。破片には周溝の下層～溝底付近で出土したものと，墳丘の流土（２層）から出土したものとがあり接合した。

須恵器

壺（Fig.16－145）　扁球形の胴部に，ほぼ直立する口縁部がつく短頸壺である。口縁部は横ナデ，胴部下半はタタキの後にカキメを施す。内面はナデ仕上げされている。134・135とともに，周溝溝底からおしつぶされた状態で出土した。

c）表採，その他

図示しなかったが，墳丘の流土中（2層）から，弥生時代後期後葉の甕の口縁部破片，C-7区の段落ち部から須恵器坏身の破片が出土している。

また，石室の基底面の溝状の凹みから，赤色顔料の小塊が出土した。福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏から，ベンガラで，パイプ状粒子を含むとの教示をえた。パイプ状粒子は，南九州の古墳時代後期にともなう朱玉に多くみられるという。本例は，取り上げに失敗したため，かなり崩れており，ごく一部しか採集できなかったので，朱玉であるか否かは断定出来ない。今後の資料の増加をまちたい。

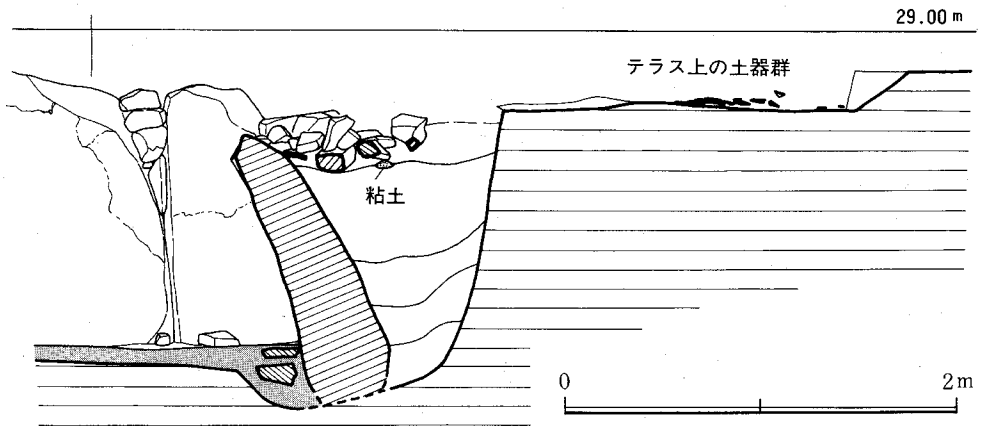


Fig.22　Ⅷ－1号墳玄室の腰石上面の根じめ石の状況　（縮尺　1/50）

Ⅳ　調査の記録２――広石遺跡群Ｅ地点

１．弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

a）遺　　構

１～４区では，Ⅷ－１号墳の墳丘基底面，５～８区では９層上面で，弥生時代後期～古墳時代前期の石棺墓７基・木棺墓３基・土壙５基・ピットを確認した。ただし，遺構の埋土が９層と同じ黄褐色系の色調を呈していたので，遺構の確認は，かなりむずかしかった。そのため，中には９層の掘り下げ中に確認できたものや，10層上面でようやく検出できたものが含まれる。

① 石棺墓（遺構略号　SQ）

ＳＱ－01（Fig.23, PL.11－①）　Ｂ－７区で，表土剝ぎ作業中に検出した。蓋石は，すでに失われていた。古くから露出していたのであろう。墓壙は，隅丸長方形を呈する。上縁で長さ2.42m，幅1.1～1.4mをはかり，10層まで掘り込まれている。墓壙の南側は，崖面にかかっている。石棺は，墓壙の中央に，両側３枚，小口１枚の扁平な花崗岩で組まれている。棺材は，墓壙下部に暗黒灰色砂をつめて固定し，棺外に暗褐色の砂質シルトをつめて裏込めとする。棺材の隙間は，小さめの花崗岩で外側からおさえ込む。棺底は東から西へむかって緩やかに高くなる。東側小口部付近に赤色顔料が集中していた。おそらく頭位を東にむけて埋葬されたのであろう。主軸方位はＳ－38°－Ｅで，棺身内法は全長1.52m，幅0.4mほどをはかる。

ＳＱ－02（Fig.23, PL.11－②）　Ｃ－６区で，表土剝ぎ作業中に確認した。蓋石はすでに失われ，棺内に東側の側板が倒れ込んだ状態で検出された。墓壙は10層上面まで掘り下げて，ようやく検出できた。隅丸方形で，上縁で長さ0.96m，幅0.5～0.78mをはかる。石棺は墓壙の北西隅に寄せてつくられ，棺材はいずれも花崗岩を使っている。両側板は，墓壙底を溝状に掘り凹めて固定している。南側小口部は，裏面に方柱状の花崗岩をおき補強している。棺底には裏込めの土と同じ暗黄褐色シルトを貼っている。棺材には，内側に赤色顔料が付着していた。棺の内法は，棺長0.44m，南側小口部で幅0.2m，北側小口部で幅0.22mをはかる。頭位は不明で，主軸方位はＮ－19°－Ｗもしくは Ｓ－19°－Ｅである。

ＳＱ－03（Fig.23, PL.11－②）　Ｃ－６区，ＳＱ－02の北側に営まれていた。安全対策のため崖面を切り落とす作業中に，石棺の棺材と思われる板石が確認された。板石は崖下に落ちてしまったが，墓壙を９層上面で確認した。墓壙の北側の大半は崖にかかり失われ，東西を木の根でいためられていたが，隅丸長方形を呈すると考えられる。上縁で，残存長0.8m，南側小口部の幅0.92m，９層上面からの深さ0.2～0.3mをはかる。墓壙底は10層の上面で止められている。

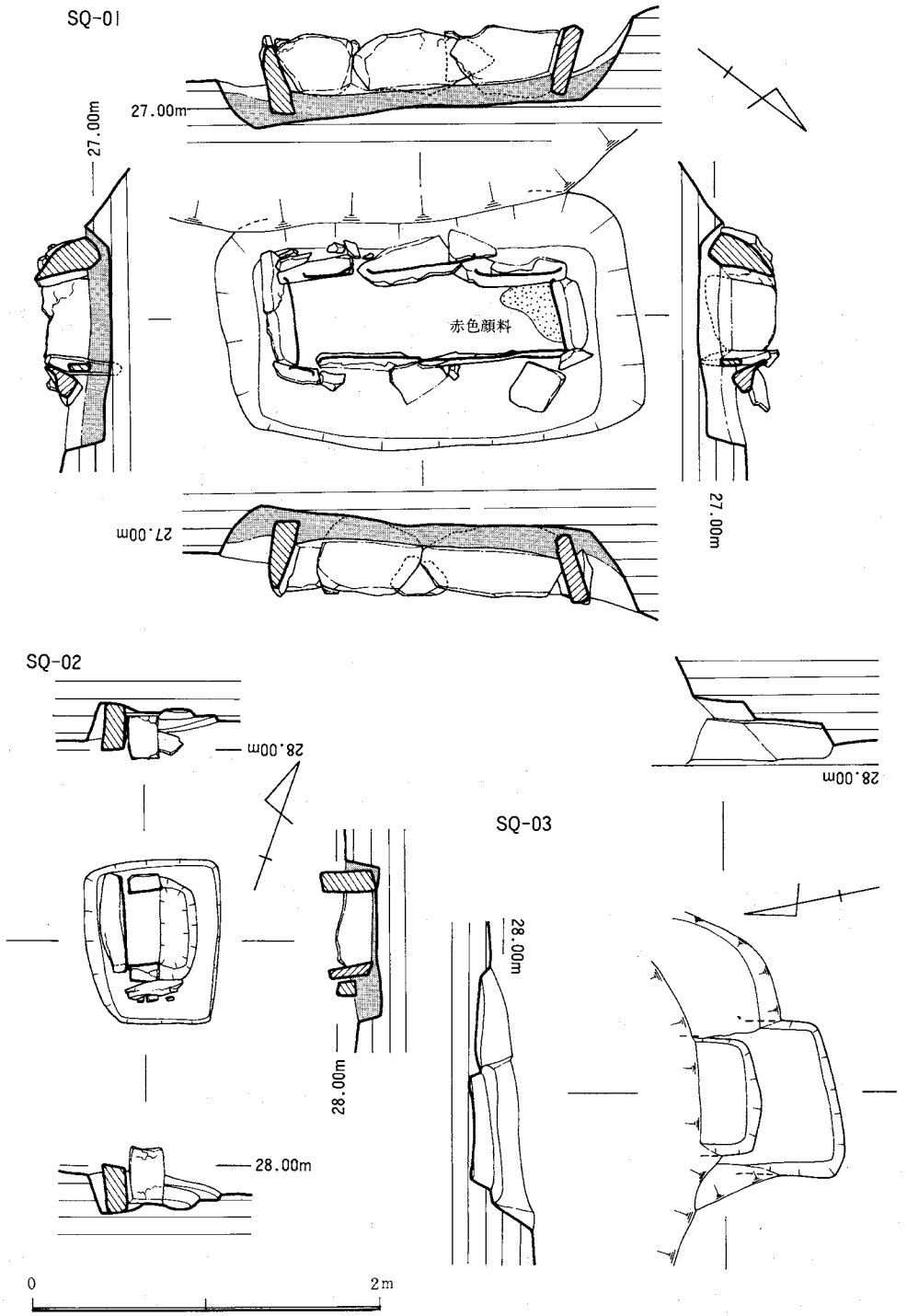


Fig.23　E地点石棺墓１　（縮尺　1/40）

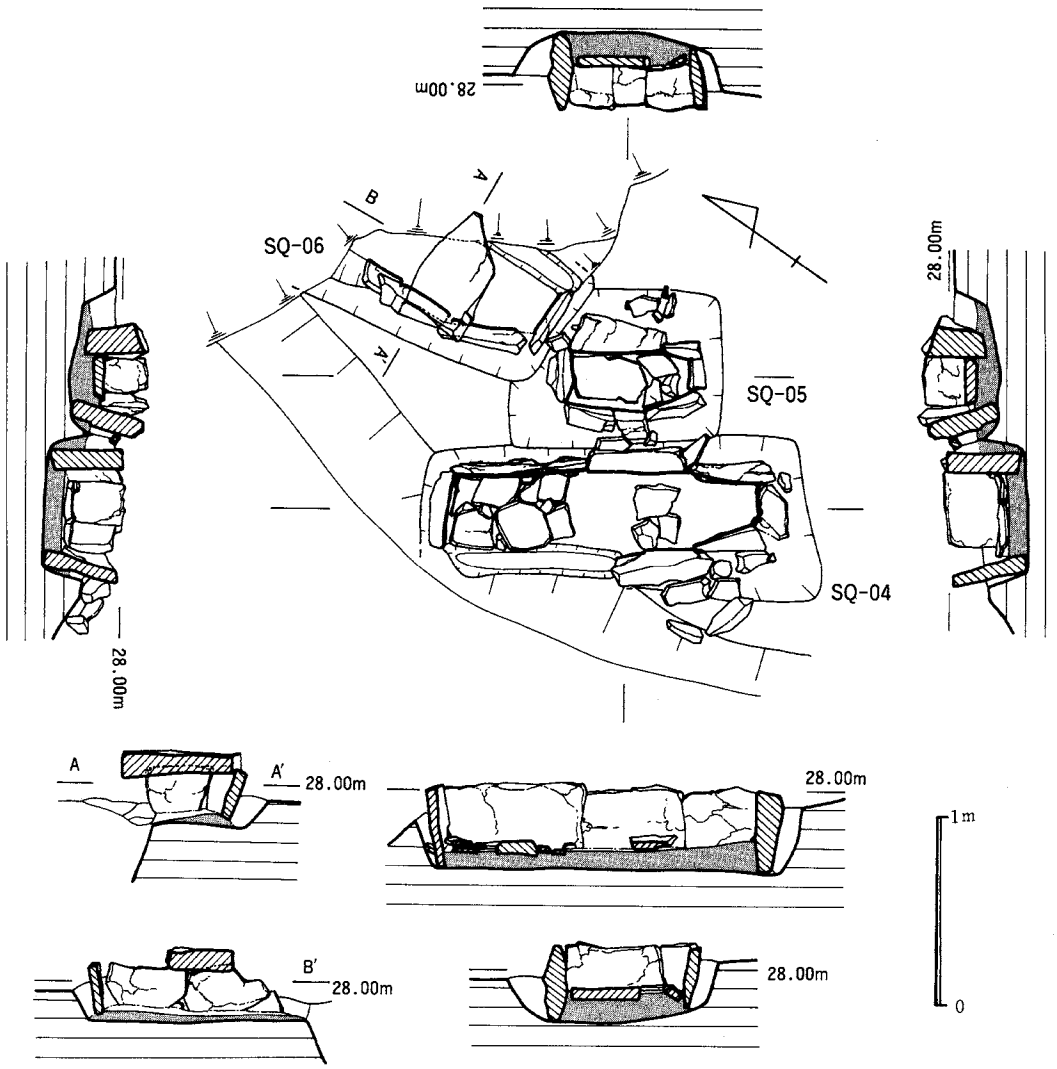


Fig.24　E地点石棺墓２　（縮尺　1/40）

墓壙内では，棺壙が確認された。残存長0.34m，幅0.66m，深さ約0.1m。崖下に落下した板石は，大きさから南側小口部にあたると考えられる。花崗岩で，片面に赤色顔料が付着していた。頭位は不明である。N－11°－Eもしくは S－11°－Wである。

ＳＱ－04（Fig.24, PL.11－③）　Ｃ－５区で，表土剝ぎ作業中に確認した。墓壙は，Ⅷ－１号墳の周溝に一部かかり，北西側のＳＱ－05に切られている。 長方形を呈し，上縁で墓壙長2.04m，南東側小口部の幅0.86m，９層上面からの深さ0.38mをはかる。石棺は墓壙に暗黄褐色シルトや，小ぶりの転石をつかめながら，両側板３個づつを使い，小口部をはさむように組ん

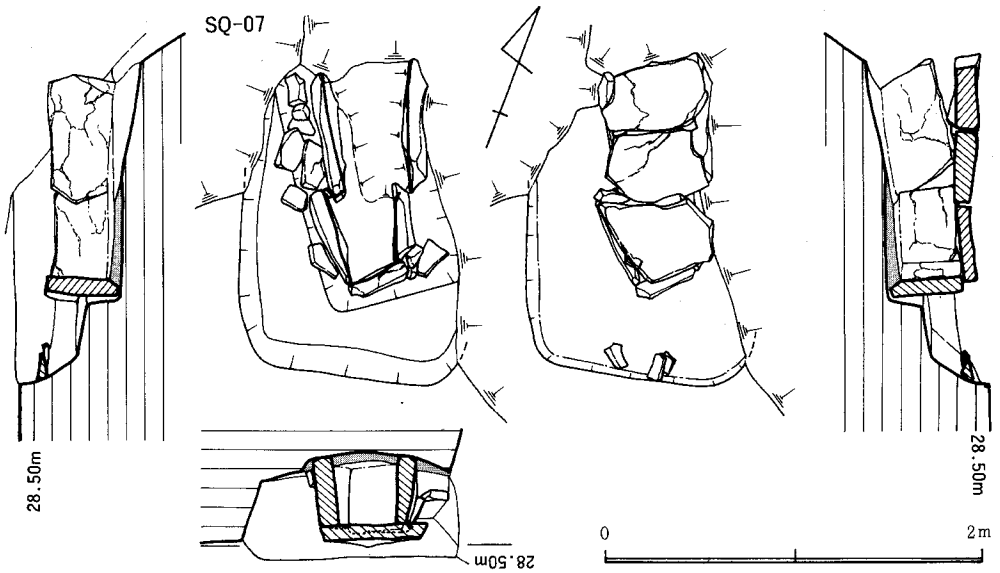


Fig.25　E地点石棺墓３　（縮尺　1/40）

でいる。南西側の側板の１枚は棺内に倒れ込んでいた。床面には，扁平な転石や割石を敷くが，棺内の攪乱が著しく，部分的にしか残っていない。棺材と裏込めの転石は，すべて花崗岩である。棺の内法は，主軸長1.62m，北東側の小口部幅0.38m，南西側の小口部幅0.2mをはかる。棺材には赤色顔料が付着していた。また，棺底の北半部でも集中して検出したので，頭位はN－35°－Wと考えられる。

ＳＱ－05（Fig.24, PL.11－③）　ＳＱ－04とほぼ平行して営まれている。ＳＱ－04を切り，ＳＱ－06に切られている。蓋石は，すでに失われ，棺内には腐蝕土がつまっていた。墓壙は長さ1.1m，幅0.86mと正方形に近い。９層の掘り抜き，標高27.72mまで掘り下げ，暗黄褐色シルトをつめながら，棺材を固定している。石棺は墓壙のほぼ中央にあり，長軸長0.62m，北側の小口部幅0.28m，南西側の小口部幅0.19mをはかる。棺材は板状のものと，方柱状に近いものを組み合わせている。両小口部に１個ずつ，北東側の側枚に２個，南西側の側板に３個の花崗岩を使っている。棺底には花崗岩の扁平な転石と割石を敷いている。棺材には赤色顔料が付着していた。頭位は小口部の幅の違いから，N－35°－Wと考えられる。

ＳＱ－06（Fig.24, PL.11－③）　Ｃ－６区に営まれている。調査区北側の崖面の切り落し作業中に石棺を確認し，９層上面で墓壙のプランを検出した。蓋石が１枚残っているものの，遺存状態は非常に悪い。ＳＱ－05を切っている。墓壙は隅丸長方受を呈し，遺存長1.18m，南側小口部幅0.7mをはかる。石材は，南側小口部の１個，西側側枚の２個しか残っていない。ただし，西側側板を据えるためと考えられる溝状の凹みを壙底で確認した。棺材の組み方は，ＳＱ－

04・05とくらべ，かなり粗雑である。むしろＳＱ－07に近いが，より雑である。石材の石面を目一杯使ってててるため，棺材の間には隙間が生じている。狭い隙間には転石をつめ，広い隙間には，棺外から，扁平な板石で覆う。棺底には石棺の裏込め土と同じ暗黄褐色砂質シルトを貼っている。北側の棺幅が，わずかに広くなっててるため，頭位はＮ－６°－Ｅと考えられる。内法は残存長1.08ｍ，南側小口幅0.26ｍをはかる。棺材には赤色顔料が付着している。

ＳＱ－07（Fig.25, PL.12－①～③）　Ｃ－３区で，調査前から崖面に露出していた。Ⅷ－１号墳の墓壙に切られ，縄文時代早期のＳＰ－28を切っている。墓壙は大部分が削られているが，隅丸長方形を呈するものと考えられる。墓壙底は，10層上面の標高28.20～28.25ｍまで掘られている。上縁で残存長1.67ｍ，南側の小口部幅1.13ｍをはかる。墓壙の対角線上に10層を掘り下げ長方形の棺壙を掘り，石棺を組み，蓋石を構架している。棺材を固定するため，棺壙の四周は掘り凹められている。蓋石が３枚，両側板が２枚，南側小口部１枚が残っていた。いずれも花崗岩の扁平な板石である。側板は交互に重ね合せて組まれ，棺身自体は墓壙に平行する。遺存状態が良好な東側の側板の裏込めに花崗岩の転石を詰め込んでいる。棺底は，攪乱が著しい。棺底および側板，小口板蓋石には赤色顔料が付着している。棺の内法は，残存主軸長1.12ｍ，南側の小口部幅0.25ｍをはかる。棺身は北側にむかって若干広い。したがって，頭位はＮ－26°－Ｗと考えられる。

ⅱ 木棺墓（遺構略号　**SR**）

ＳＲ－08（Fig.26, PL.12－①）　Ｂ－５～６区でＳＫ－13を掘り上げ，９層を下げていた途中，直径10～20cmほどの礫群があらわれ，遺構の存在に気がついた。したがって，遺構の検出面は９層の下半であるが，掘り込み面は９層上面であろうか。墓壙と，棺を据える棺壙からなる。墓壙は隅丸の細長い長方形である。墓壙底は，10層の上面付近まで掘り込まれている。南端部は崖面にかかり失われている。上縁で残存長約2.3ｍ，北側の小口部幅0.5ｍをはかる。墓壙の中央には棺壙が掘られている。棺底には棺材を固定するための掘り込みはみられない。主軸長は1.6ｍ，北側の小口部幅0.6ｍ，南側の小口部幅0.55ｍをはかる。北側がわずかに広い。頭位はＮ－31°－Ｗと考えられる。棺壙上面では礫と土器片が，北側から棺内に流込んだような状態で検出した。また，墓壙底から若干浮いた状態で，鉄器片が出土した。

ＳＲ－09（Fig.26, PL.12－②）　Ｂ－４区の，Ⅷ－１号墳基底の整形面（８層上面）で，遺構らしい土の汚れを確認した。しかし，明確なプランを確認できなかったので，９層を10cmづつ掘り下げることとした。20cmほど掘り下げた時点で，平面プランを確認できた。ＳＰ－33と木の根で，西側小口部が切られている。墓壙は不整台形を呈し，北側が２段に掘られている。上縁で主軸長1.9ｍ，西側の小口部幅は推定0.8cmほど，東側の小口部幅は1.28ｍをはかる。棺壙はやや東寄りに，10層に達するまで掘り込まれ，主軸長1.4ｍ，小口部幅0.62～0.65ｍをはか

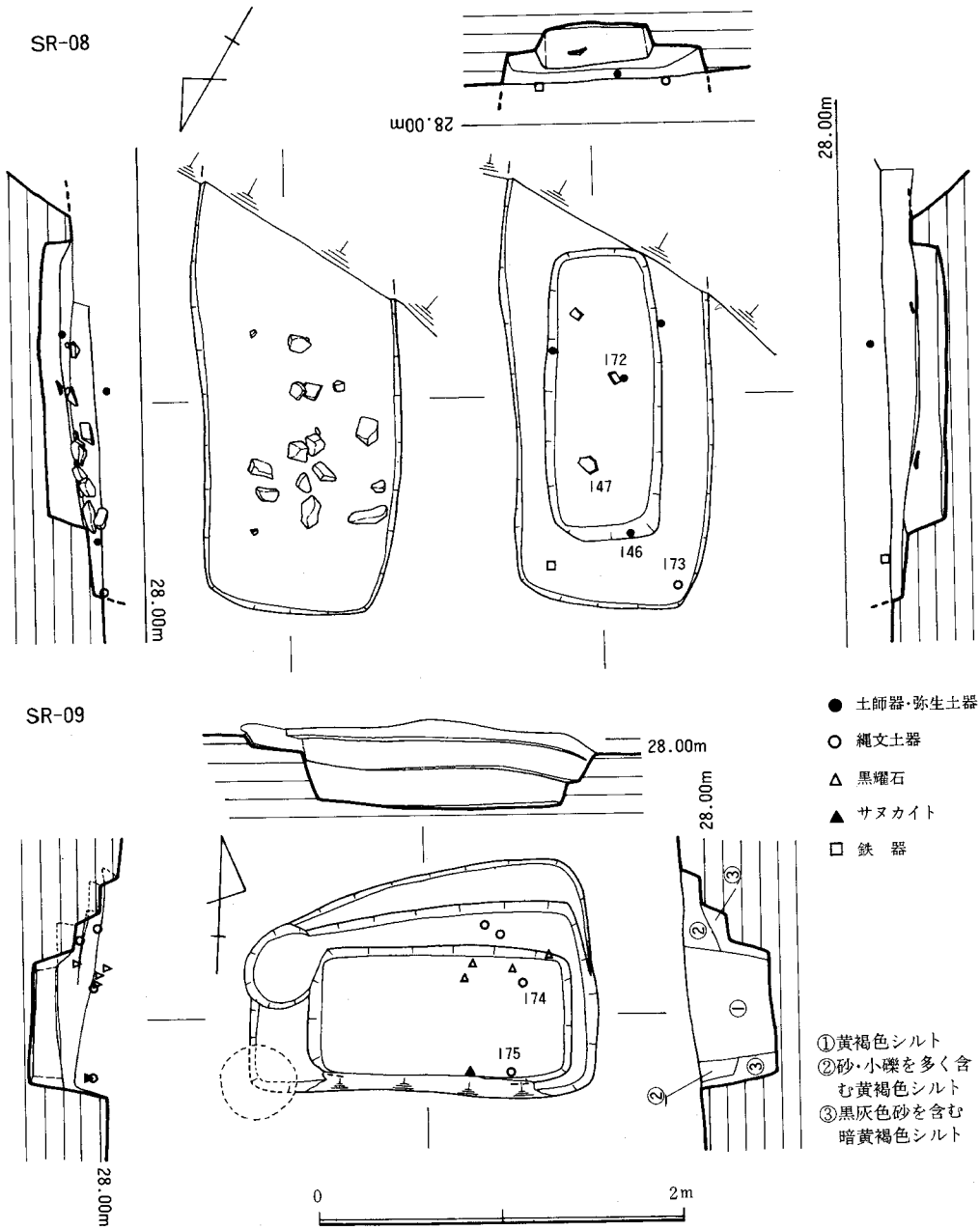


Fig.26　E地点木棺墓1　(縮尺　1/40)

る。棺底はほぼ水平であるが，西側の小口部付近で緩やかに高くなる。頭位はN－93°－Wと考えてよさそうである。埋土中から縄文土器・黒耀石・サヌカイトの細片が出土している。混入したものと考える。

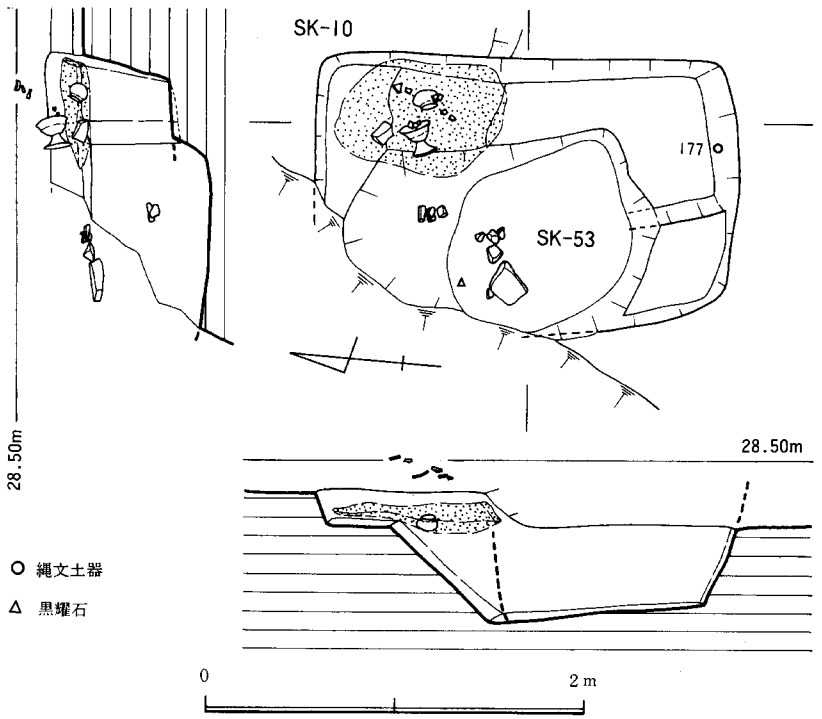


Fig.27　E地点木棺墓２　（縮尺　1/40）

ＳＲ－10(Fig.27,PL.12－③)

Ｂ・Ｃ－３区で，９層を掘り下げ中に存在に気がついたが，墓壙のプランを完全に確認できたのは10層の上面である。当初，１つの遺構と考えていたが，土層断面を観察した結果，土壙と木棺墓が切り合っていることが明らかとなった。木棺墓をＳＲ－10，土壙をＳＫ－53とした。ＳＲ－10がＳＫ－53を切っている。墓壙は長方形を呈し，主軸長2.3m，南側の小口部幅1.2mをはかる。棺壙は墓壙の南東隅に掘り込まれている。北側小口部を掘りすぎ，正確な主軸長は明らかではない。北側小口部付近の赤色顔料の分布範囲から推定1.05mほどであろうか。南側の小口部幅は0.64mをはかる。主軸方位はＮ－５°－Ｗである。墓壙の北側には，土師器の高坏（Fig.30－150），短頸壺（Fig.30－148），鉢（Fig.30－149）が横転した状態で出土した。また，その周辺の0.6×0.9mほどの範囲で赤色顔料を検出した。

(iii) 土壙　（遺構略号　**SK**）

出土遺物や埋土の状況から弥生時代後期～古墳時代前期と考えられるものを報告する。

ＳＫ－11（Fig.28）　Ｃ・Ｄ－３・４区の９層上面で確認した。北西側が崖面にかかり切断されている。平面形は不整隋円形となるのであろ。残存長1.03m，幅0.76m，深さ18～20cm。壁はゆるやかに立ち上がり，壙底は西側にむかって次第に低くなる。埋土は３層に分けられるが，全体的な埋土の質はＳＫ－14と共通する。出土遺物は，黒耀石の打製石鏃（Fig.36－21）・破片，炭化物小片と少ない。いずれも３層中から出土した。

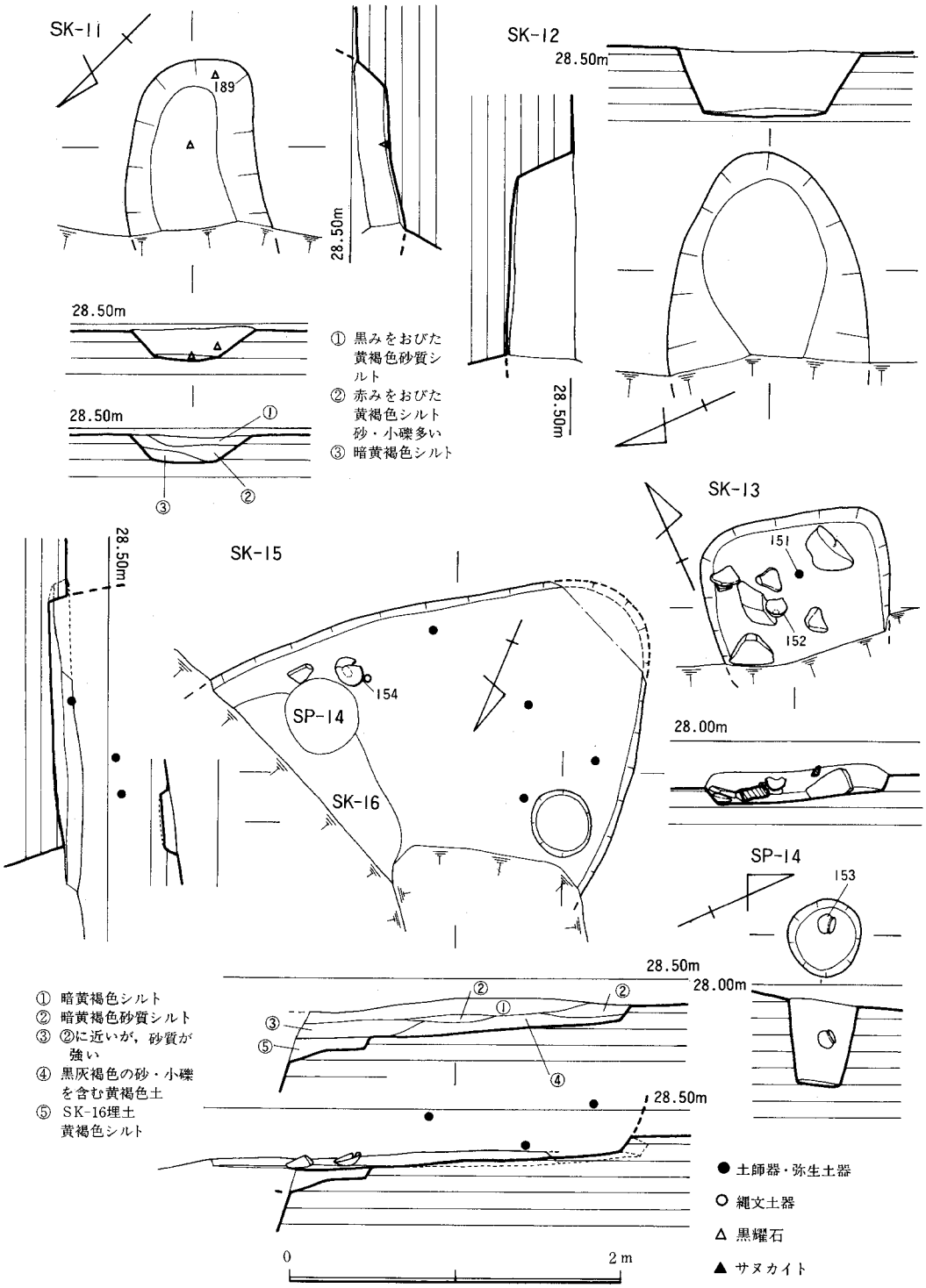


Fig.28 E地点土壙・ピット1 （縮尺 1/40）

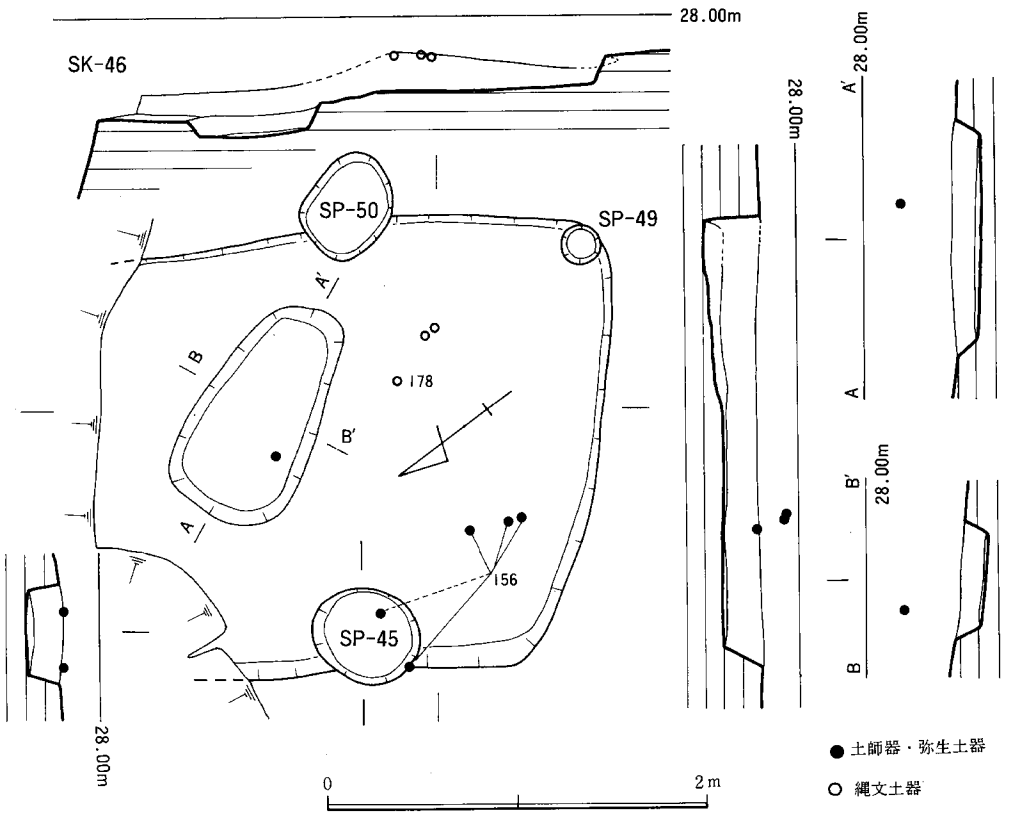


Fig.29 E地点土壙・ピット2 （縮尺 1/40）

SK－12（Fig.28） B－3区の9層上面で確認した。西端部をⅧ－1号墳の墓壙で削りとられている。平面プランは，一方がふくらんだ不整な楕円形で，残存長軸長1.3m，短軸長1.23m，深さ0.4mをはかる。埋土は淡黄灰色砂質土で，直径0.2～4cmの礫や小石を多く含む。埋土の質は基本的にはSK－11と共通する。遺物は出土しなかった。

SK－13（Fig.28, PL.10－②） B－6区の9層上面で検出した。南側は崖面にかかり削りとられている。SK－08の上面に営まれている。1.14×0.86＋αm，深さ14cmをはかる。埋土は砂礫を多く含む。壙底には転石がつまり，その間から弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の無頸壺の口縁部片（Fig.30－151），鉢（Fig.30－152）が出土した。

SK－15（Fig.28, PL.10－③） C－3・4区にある不整形の大形土壙である。9層を掘り下げ中に確認した。SP－14に切られ，床面で，小ピットとSK－16を検出した。出土遺物には，土師器の鉢（Fig.30－154），縄文土器（条痕文土器）の小片，炭化物片などがある。縄文土器は混入と考えられる。

SK－46（Fig.29, PL.15－②） C－6区の10層上面で確認した。北側は崖面にかかり切断

され，一部はＳＱ－03に切られる。そのほか，ＳＰ－45・47・50によって切られる。平面プランは不整長方形を呈する。残存長2.66m，幅2.32m，深さ20cmをはかる。壙底はかなり凹凸がある。また，壙底で隅丸不整長方形の浅い土壙を検出した。埋土は，ＳＫ－46と同じく暗黄褐色砂質シルトであり，ＳＫ－46にともなうものか。出土遺物は鉢（Fig.30－156）が破片となって，散乱した状態で出土した。竪穴式住居跡の可能性も考えたが，柱穴など付属施設は検出されず，ここでは土壙としてとりあっかった。

ⓘⓥ ピット（遺構略号　**SP**）

出土遺物から，弥生時代後期～古墳時代前期と考えられるピットは，ＳＰ－14しかない。しかし，切り合い関係や埋土の状況などから，ＳＰ－27・29～33・38～40・42・45・47～51は，該期のものである可能性がつよい。

ＳＰ－14（Fig.28, PL.10－①）　Ｃ－４区の８層上面で確認した。ＳＫ－15・16を切っている。直径40cm前後，深さ50cmの円形のピットで，埋土は白っぽい黄褐色シルトである。完形の短頸壺（Fig.30－153）が出土した。

ｂ）遺　物（Fig.30）

出土遺物は量が少ない上に，細片化したものが多く，図化しえたものは限られている。

146・147はＳＲ－08から出土した。146は大形壺ないし甕の胴部突帯片である。ハケメ原体によるキザミを施す。147は甕の底部である。凸レンズぎみの底部で，外面はハケメ，内面はハケメの後にナデ仕上げを施す。内底付近には指頭痕を残す。弥生時代後期後葉の西新町式土器古段階のものである。

148～150はＳＲ－10に供献されたものである。148は短頸壺で，扁球形の胴部に，直立する短い口縁部がつく。胴部外面はハケメを施した後，あらいミガキをかける。肩部には暗文がみられる。口縁部付近は横ナデ，内面はナデ仕上げする。淡赤茶色ないし黄茶色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。149は精製の鉢である。外面は丁寧なミガキ，内面はハケメを施す。淡黄褐色～淡黄灰色を呈する。150は脚が短く，坏部上位が短く反転する高坏である。外面はハケメで調整した後に，ミガキを施す。とくに脚部のミガキは暗文風に仕上げている。また，坏部内には放射状の暗文を施す。脚端部と脚内面は横ナデを施す。淡黄褐色～黄灰色を呈し，胎土には砂粒をほとんど含まない。148～150は，いずれも古墳時前期初頭の有田式土器である。

151・152はＳＫ－13から出土した。151は胎土の良さと器壁が薄いことから，「く」の字形口縁部を持つ無頸壺であると考える。内外面ともハケメの後にナデを施す。胎土には微細・細砂粒を多く含むが，粘土には精良なものを使っている。152は直口縁の鉢である。内外面には，かなり雑な指ナデ痕跡を残す。粗・細砂粒を多く含み，褐灰色を呈する。151・152は西新町式～

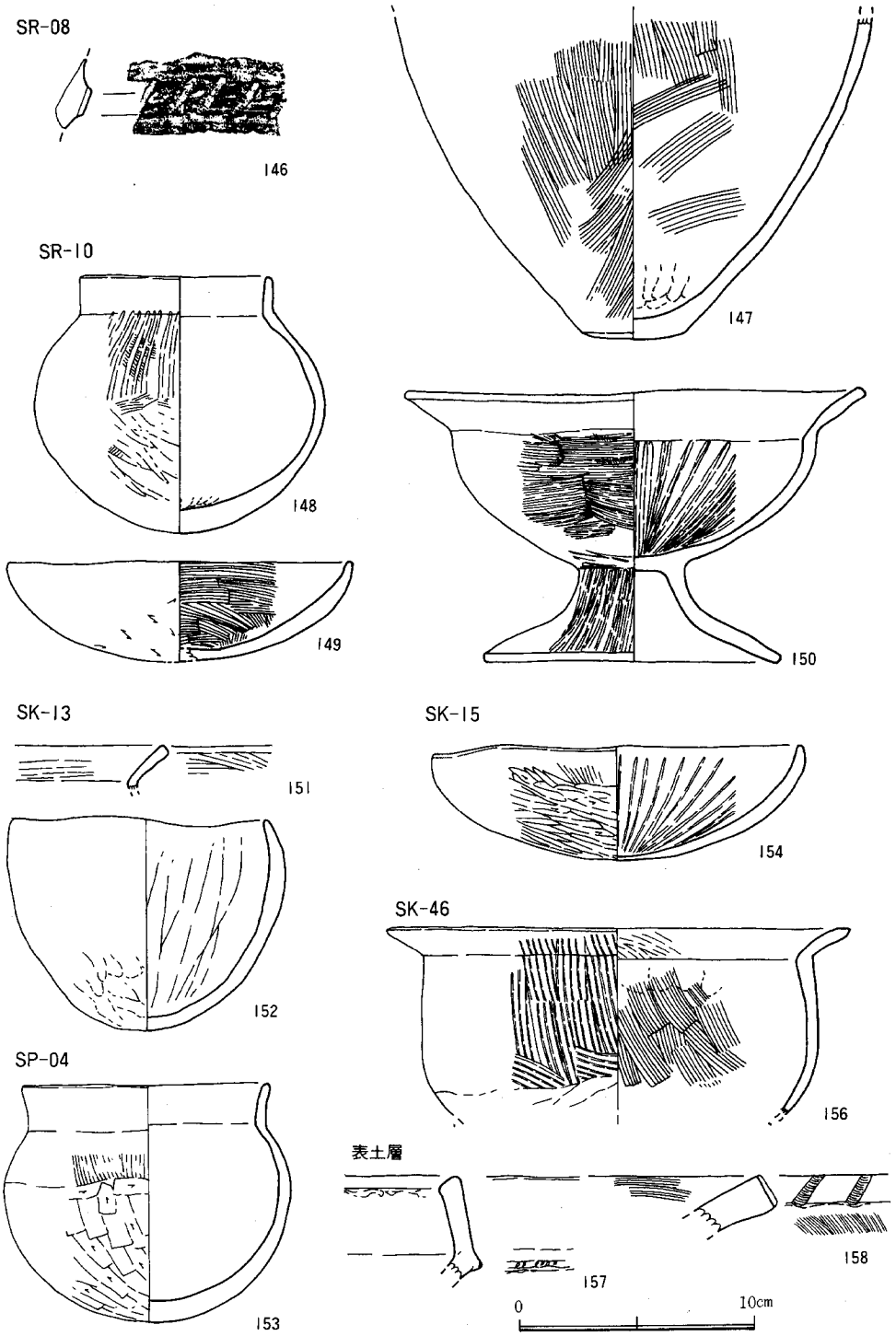


Fig.30 E地点出土遺物1 （縮尺 1/3）

有田式土器のものである。

153はＳＰ－14から出土した短頸壺である。胴部外面は下半を丹念にケズリ，上半にはハケメ調整を施す。内面はナデ。淡茶色から明茶赤色を呈する。胎土は微細・細砂粒を少量含むのみである。西新町式土器に比定できる。

154はＳＫ－15から出土した精製鉢である。外面はハケメの後に，乱雑なミガキを施す。部分的にハケメが認められる。内面には放射状の暗文を施す。淡黄褐色ないし淡黄灰色を呈する。西新町式土器～有田式土器のものである。

156はＳＫ－46から出土した。外面には目のあらいハケメを施し，内面には細密なハケメの後にナデを施す。胎土には細砂粒を非常に多く含み，淡黄褐色を呈する。西新町式土器～有田式土器に比定されるものである。

以上の遺物のほかに，ＳＫ－08の墓壙から鉄器片が出土している。しかし，扁平な鉄器ではあるが，小さな破片であり遺存状態も非常に悪いため，器種は不明である。

２．縄文時代の遺構と遺物

ａ）遺　　構

土壙12基のほかピットがある。いずれも９層の掘り下げ途中，あるいは10層上面で確認できた。埋土は，弥生時代後期～古墳時代前期の遺構とくらべ，やや明るい黄褐色土を基本とする。

ⓘ 土壙（遺構略号　SK）

ＳＫ－16（(Fig.31, PL.13－③）　Ｃ－４区のＳＫ－15の壙底面で検出した。北側では崖で切断され，南東隅をＳＰ－14で切られている。平面プランは隅丸方形であろうか。径は残存長で42cm×134cm，深さ14cmほどである。壙底の東側が６cmほど掘り込まれている。出土遺物はないが，埋土は黄褐色シルトであり，他の縄文時代の遺構と共通しているので，該期の遺構であると考えた。

ＳＫ－17（Fig.32）　Ｄ－２区の10層上面で検出した。北側をＳＫ－19，東側を崖で切断されていた。深さ５～８cmほどの土壙である。出土遺物はないが，埋土はＳＫ－19と共通した質であり，縄文時代のものと考えた。

ＳＫ－18（Fig.32, PL.15－①）　Ｄ－１・２区で，９層を掘り下げる途中，10層上面ちかくで検出した。当初，ＳＫ－19にともなう掘り込みと考えていたが，土層断面を観察した結果，別の遺構と判断した。遺構の大半を崖で切断されている。出土遺構は少なく，縄文土器の細片が３点出土したのみである。うち２点は⑦層から出土。⑥層から出土した１点は，ＳＫ－19で

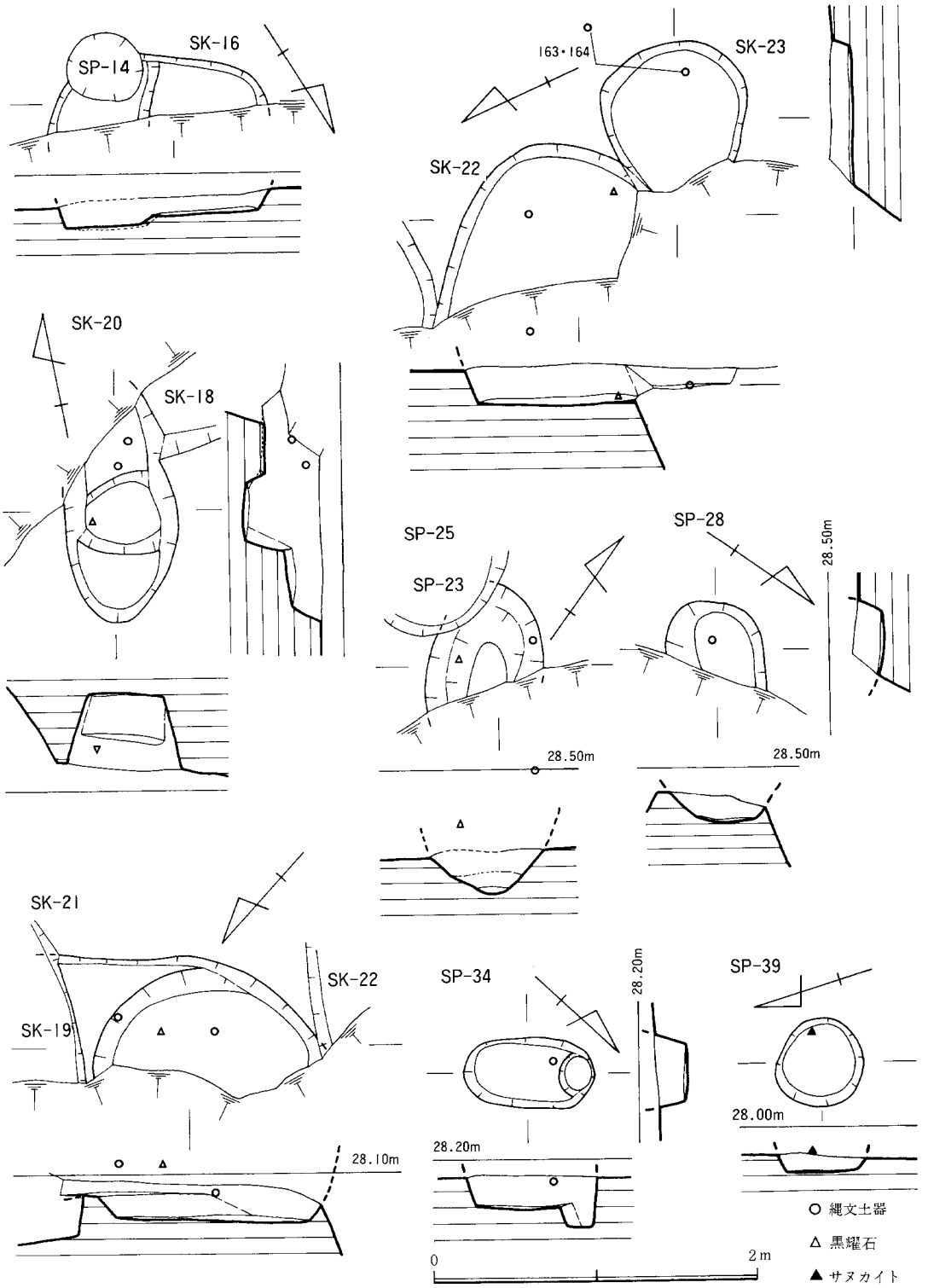


Fig.31 E地点土壙・ピット3 （縮尺 1/40）

出土したものと接合する。SK－19からの混入であろう。

ＳＫ－19（Fig.32, PL.15－①）　ＳＫ－18に切られている。大部分を崖で切断されている。残存径は約2.2m。深さは25cm。検出した縄文時代の遺構の中で，出土遺物がもっとも多い。縄文土器（Fig.34－158～162）のほか，黒耀石の打製石鏃（Fig.36－192～193）・削片・砕片，炭化物小片が出土している。

ＳＫ－20（Fig.31, PL.13-②）　Ｄ－２区のＳＫ－18・19の壙底面で確認した。北端部を崖で切られている。長軸1.5m×短軸0.7mほどの楕円形プランの土壙と考えられる。埋土は黄褐色土で，縄文土器・黒耀石の小片が出土した。

ＳＫ－21(Fig.31, PL.13－①)　Ｃ－１区の10層上面で検出した。西側を崖で，北側をＳＫ－19で切られ，全体の形状は不明である。南側の壙底面に円形の掘り込みがある。埋土は黄褐色シルトで，砂礫をほとんど含まない。出土遺物は，縄文土器１点をのぞき，９層掘り下げ中に出土したものばかりである。縄文土器のほか，黒耀石の打製石鏃（Fig.36－190),炭化物の小片が出土した。

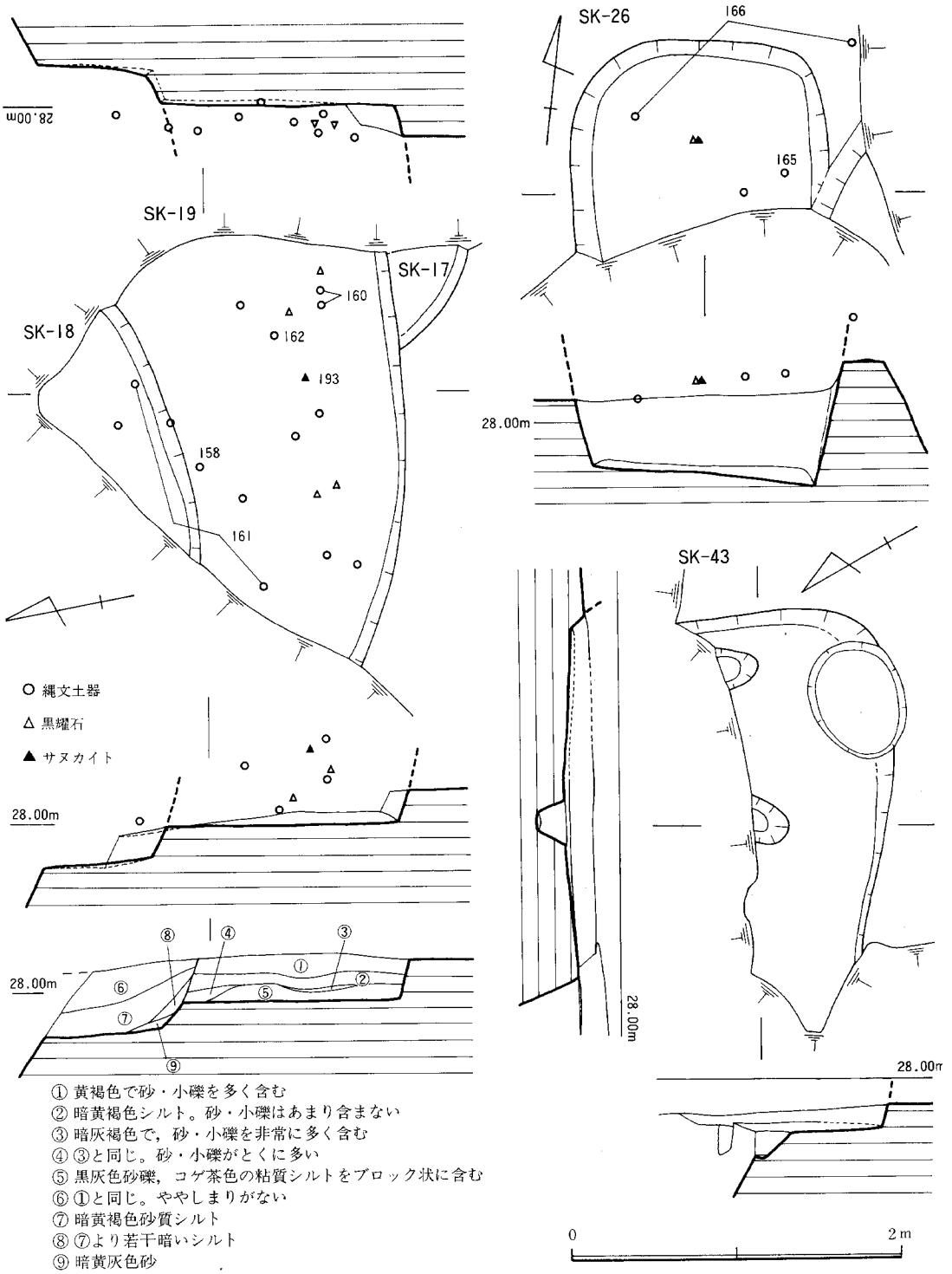
ＳＫ－22（Fig.31）　Ｃ－１・２区の10層上面で確認した。西側と南側の大部分を崖で切断されている。ＳＫ－21とＳＫ－23とに切られている。平面形は不整楕円形と考えられる。埋土は黄褐色シルトで，９層掘り下げ中に縄文土器，壙底付近から黒耀石片が出土した。

ＳＫ－23（Fig.31）　Ｃ－２区の10層上面で確認した。西側を崖で切断された不整円形プランの土壙である。径90cm前後。埋土は黄褐色シルトで，わずかに砂礫を含む。９層下部部分から縄文土器が出土し，壙底付近で黒耀石が出土。縄文土器のうち１片は，遺構外の９層上面で出土した破片と接合する。

ＳＫ－26（Fig.32）　Ｃ－２区に位置する。南側をⅧ－１号墳の墓壙で切られている。断面では９層中位で平面形を確認できると考えていたが，結果的には，10層上面でようやく確認できた。隅丸方形のプランをもち，径1.56×1.3＋αm，深さ0.76cmをはかる。埋土は黄褐色の砂質シルトである。遺物は，いずれも９層掘り下げ中に出土した。縄文土器・サヌカイト片，炭化物が出土している。縄文土器のうち１点は，遺構外の９層上部で出土したものと接合する。

ＳＫ－35（Fig.23, PL.13－③）　Ｃ－４区の10層上面で確認した。不整な台形様の平面プランを呈する。長さ1.22～1.38m，幅0.67mをはかる。壙底断面は船形を呈する。埋土は，やや白っぽい黄褐色シルトで，砂や小礫をわずかに含む。縄文土器・黒耀石片・サヌカイト片が出土した。縄文土器のうち１点（Fig.34－167）は，ＳＰ－36・37，遺構外から出土した破片と接合した。

ＳＫ－43（Fig.32, PL.15－②）　Ｃ－５・６区で，10層上面で確認した。竪穴式住居跡の可能性もあるが，一応土壙としてとりあつかった。平面プランは，隅丸方形を呈するものと考えられる。北側を崖で，東側をＳＱ－05・06，南側の隅をＳＰ－42で切られている。残存長は1.27×



① 黄褐色で砂・小礫を多く含む
② 暗黄褐色シルト。砂・小礫はあまり含まない
③ 暗灰褐色で，砂・小礫を非常に多く含む
④ ③と同じ。砂・小礫がとくに多い
⑤ 黒灰色砂礫，コゲ茶色の粘質シルトをブロック状に含む
⑥ ①と同じ。ややしまりがない
⑦ 暗黄褐色砂質シルト
⑧ ⑦より若干暗いシルト
⑨ 暗黄灰色砂

Fig.32 E地点土壙・ピット4 （縮尺 1/40）

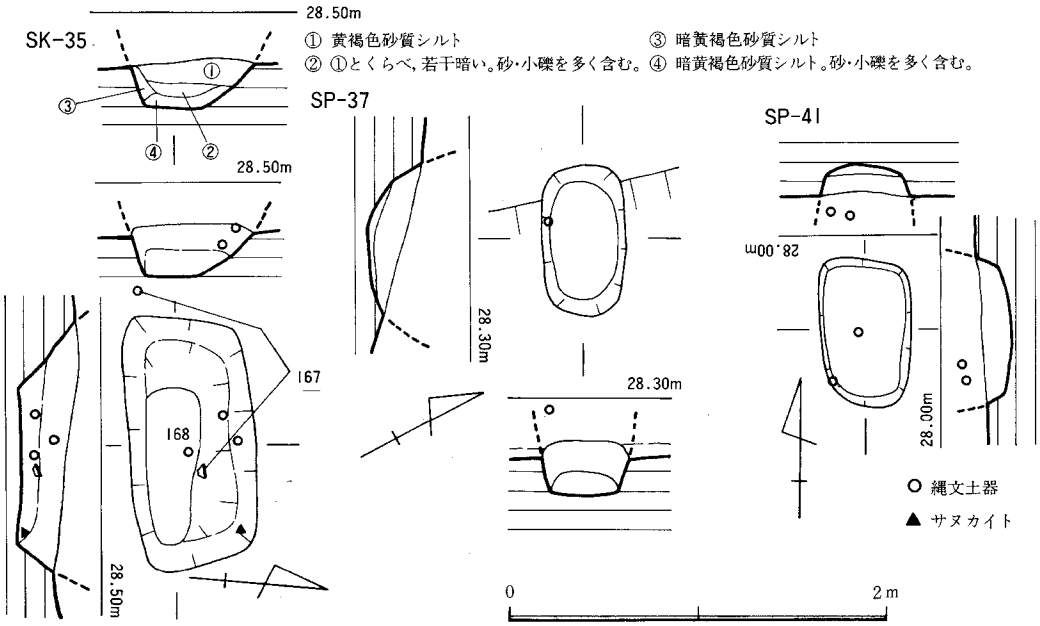


Fig.33　E地点土壙・ピット5　(縮尺　1/40)

2.56m，深さは14～16cmをはかる。床面から，深さ17cmほどの小ピットを検出した。埋土は黄褐色シルトである。出土遺物はないが，埋土の質から縄文時代のものと考えておきたい。

ＳＫ－53 (Fig.27, PL.12－③)　ＳＲ－10を掘り下げ中に検出した。不整楕円形のプランをもつ。壙底付近から黒耀石が出土している。

ⅱ ピット　(遺構略号　**SP**)

出土遺物と埋土の質から，縄文時代のものと考えられたピットを6ヶ所で確認した。いずれも埋土は黄褐色土である。しかし，土壙を含めても，遺構としての有機的なつながりは復元できなかった。

ＳＰ－25 (Fig.31)　Ｃ－２区。楕円形プランのもので，９層掘り下げ中に縄文土器の条痕土器小片と黒耀石が出土した。ただし，縄文土器は９層上部からの出土であり，ＳＰ－25のものかは確かではない。

ＳＰ－28 (Fig.31)　Ｃ－３区。Ⅷ－１号墳の墓壙とＳＱ－07に切られる楕円形のピットである。10層上面で確認した。確認面から若干下った所で，押型文土器の口縁部片が出土した。

ＳＰ－34 (Fig.31)　Ｂ－４区。楕円形プランで，北側にさらに円形の掘り込みがある。埋土中から，縄文土器片１点が出土した。この縄文土器は，ＳＫ－26で出土したもの（Fig.34－165）と同じタイプのものである。

ＳＰ－37（Fig.33）　Ｃ－４区。隅丸の長方形のピットで，Ⅷ－１号墳の周溝の肩部で検出した。９層掘り下げ中に，縄文土器の小片が出土した。

ＳＰ－39（Fig.31）　Ｃ－５区。10層上面で検出した円形ピットである。サヌカイトの小片が確認面で出土した。

ＳＰ－44（Fig.33）　Ｂ－６区。隅丸長方形のピットです。10層上面で検出した。９層掘り下げ中に押型文土器の胴部小片１点が出土した。しかし，この付近では９層が薄いために，ＳＰ－44のものかは明確ではない。

b）遺　　物

出土遺物は，小片ばかりである。後世の遺構に混じり込んだものも含めて一括して報告する。

ⓘ 縄文土器（Fig.34・35－158～186）

158～162はＳＫ－19から出土した。158～161は条痕文土器である。157は他の２片とくらべて器壁がうすい。内面にも条痕文を施す。159・160の内面はケズリが施されている。159・160の内面はケズリが施されている。161は底部付近の破片で，外面は２次的な火をうけ，調整痕は不明瞭であるが，部分的に条痕を認める。４点ともに，微細砂粒を多く含み，茶赤色を呈する。159・160は内面に厚く炭化物を付着している。162は平底の底部片である。内外面ともに２次的な火をうけ，赤変している。器面のあれが著しく，調整の仔細は不明。158～161の条痕文土器につく底部であろうか。

163・164はＳＫ－23出土。同一個体の可能性の強い条痕文土器である。茶赤色を呈し，胎土には粗大・粗砂粒を多く含む。内面には炭化物が厚く付着。

165・166はＳＫ－26出土。164の外面は植物質の編み物のような圧痕がみられる。コゲ茶色を呈し，胎土には繊維を混じえる。同タイプのものがＳＰ－34から出土している。166は条痕文土器である。赤茶色で，内面には厚く炭化物が付着している。

167・168はＳＫ－35出土。口縁と口縁下に３段の刺突文を施す。原体は不明。内外ともにナデ仕上げされる。暗褐色で，外面には煤が付着する。

169はＳＰ－28出土の押型文土器である。口縁内面に楕円押型文を横走施文し，外面には縦走施文する。明茶褐色で，粗・細砂粒を非常に多く含むが，焼きしまりはよい。

170・171はＳＰ－44から出土した。169は押型文土器の胴部片で，外面には楕円押型文を縦走施文し，内面にはナデ調整を施す。暗器褐色を呈し，粗・細砂粒を多く含む。170は外面のあれが著しく，仔細は不明である。

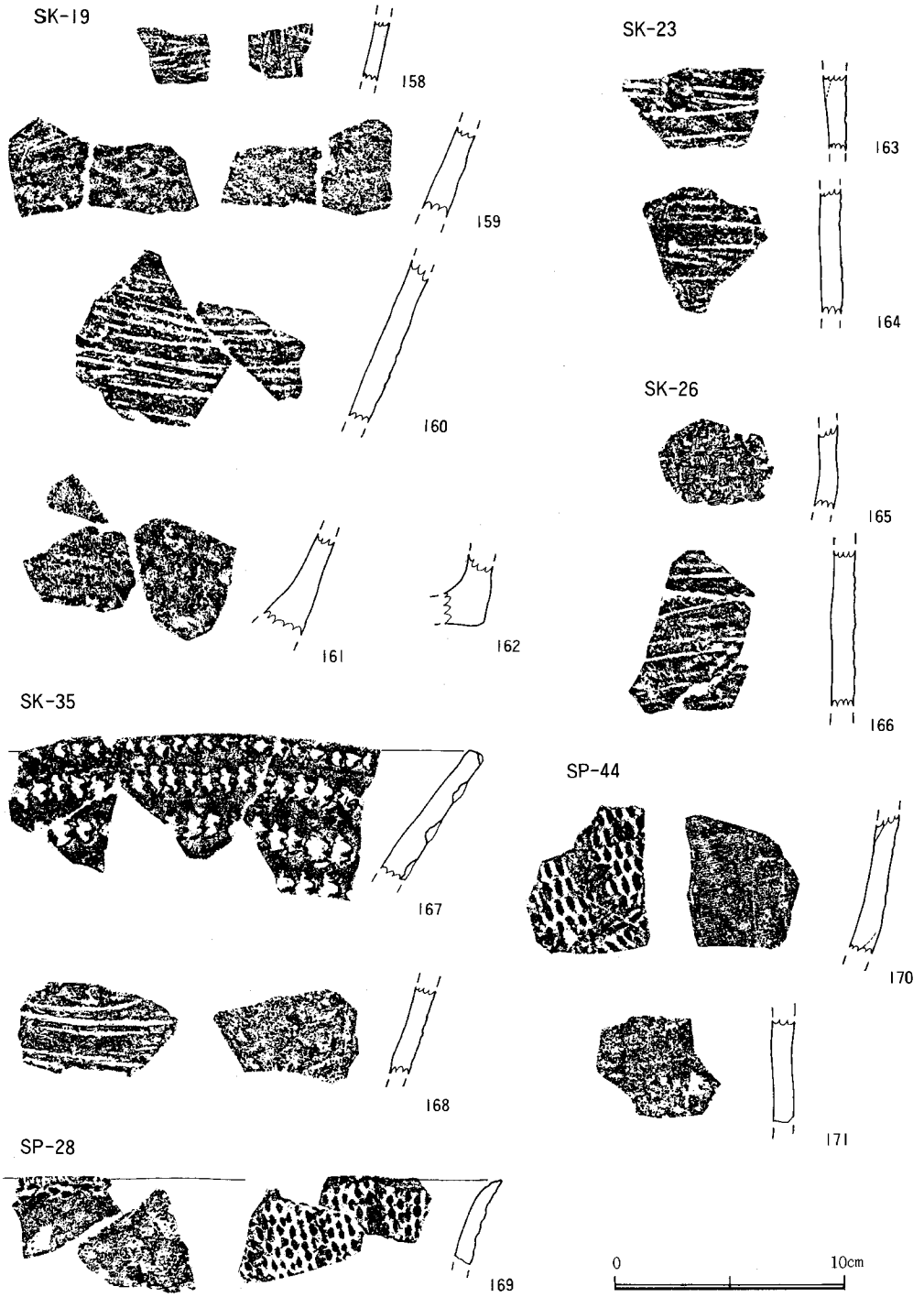


Fig.34　E地点出土遺物２　（縮尺　1/3）

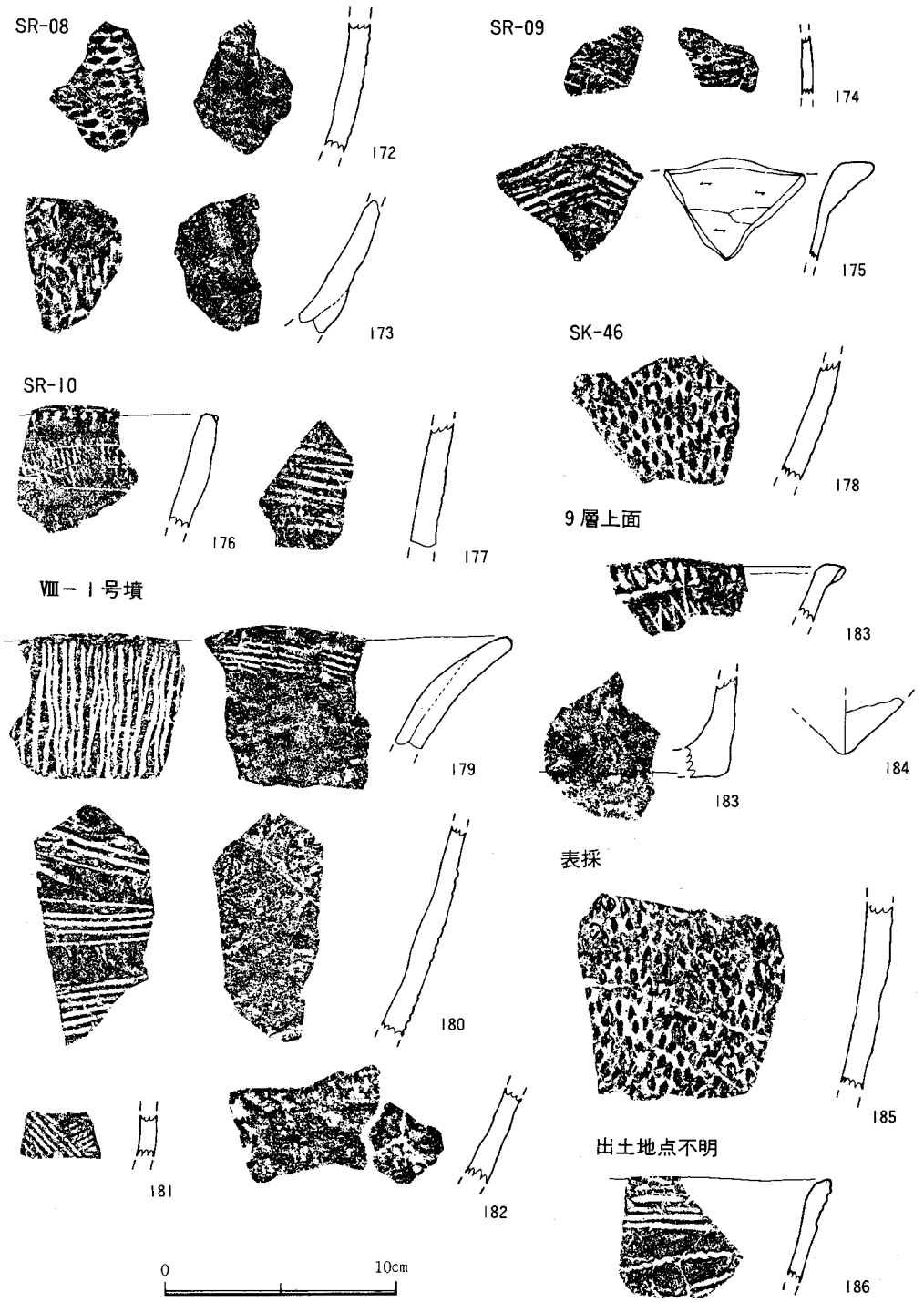


Fig.35　E地点出土遺物3　（縮尺　1/3）

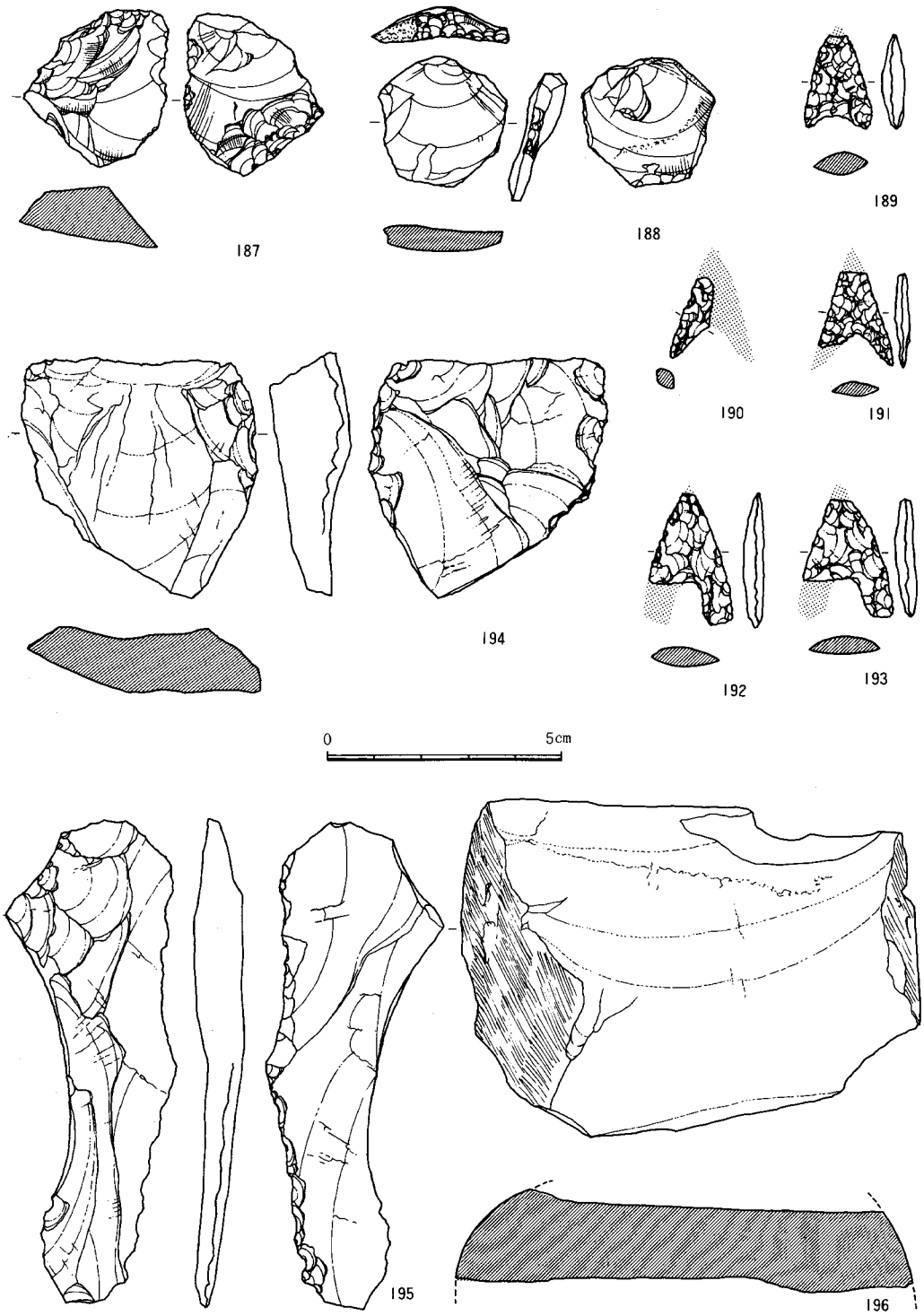


Fig.36　E地点出土遺物4　（縮尺　2/3）

以上が，縄文時代の遺構から出土した土器である。このほか，172・173はＳＲ－08に混入したもので，172は押型文土器，173は無文土器である。174・175はＳＲ－09に混入したもので，174は薄手の条痕文土器である。176・177はＳＲ－10へ混入したものである。176は口縁端部にキザミをつけ，口縁部下に撚糸文を施文し，さらに細い沈線を３条めぐらす。塞ノ神式土器か。177は条痕文土器である。

178はＳＫ－46に混入した押型文土器で，楕円押型文を縦走施文する。

179～182はⅧ－１号墳の墳丘流土（２層）・墓壙・石室内から出土している。179・181は撚糸文土器と，それに類するものである。180は撚糸文を斜交させている。

183～185は９層上部で後世の遺物と混じって出土した。184は平底，185は尖底の底部片である。

185は調査区東半部で表採した押型文土器である。楕円押型文を縦走施文する。187は出土地点不明の口縁部片である。口縁部直下に５条の凹線をめぐらし，下方に撚糸文を斜走させる。

ⅱ石　器

187はⅧ－１号墳の墓壙中から出土した。黒耀石製の不定形剥片を利用した使用痕のある剥片である。両側辺を中心として細かな刃こぼれを認める。下端部には，背面から平坦な剥離が施されている。長さ34.1㎜，幅23.6㎜，厚さ12.7㎜をはかる。188はⅧ－１号墳の墳丘盛土（３層）から出土した。黒耀石製の加工痕のある剥片で，素材剥片の打面と右側辺に，急角度の連続した剥離を加えている。使用の痕跡は，この剥離にそって背面の稜のつぶれとして認められる。長さ27.8㎜，幅28.3㎜，厚さ5.8㎜をはかる。

189～193は打製石鏃である。189～191は黒耀石製の抉りをいれた三角形鏃である。190・191は形態も酷似する。192・193はサヌカイト製の鍬形鏃である。189はＳＫ－11出土。現存長19.8㎜，幅14.5㎜，厚さ4.4㎜をはかる。190はＳＫ－21から出土した。191はⅧ－１号墳石室の前室から出土。長さ19.5㎜，幅15.6㎜，厚さ3.3㎜。192はＳＫ－19から出土した。長さ28.3㎜，幅17.3㎜，幅3.8㎜をはかる。193もＳＫ－19から出土した。長さ25.8㎜，幅18.9㎜，厚さ3.9㎜をはかる。

194はサヌカイト製の厚手の剥片を素材とするスクレイパーである。右側辺に刃部がある。長さ52.8㎜，幅51.6㎜，厚さ15.3㎜をはかる。９層上部から出土した。195も同じくサヌカイト製の横長剥片を素材とするスクレーパーである。刃部は背面側からの剥離でつくられている。長さ103.2㎜，幅35.4㎜，厚さ9.4㎜をはかる。Ⅷ－１号墳の墳丘基底面で出土した。

195は玄武岩製の太型蛤刃石斧の破片である。調査地点の西側20ｍほど離れた場所で表採した。

V　調査のまとめ

今回の調査では，これまで知られていなかった広石遺跡群の東側へのひろがりを確認することができた。また，調査範囲が160m²と狭いわりに，縄文時代から古墳時代にわたる数多くの遺構が確認できた。

調査地点は，基盤の黒灰色砂礫層（10層）の傾きから考えると，北西から南東へのびる丘陵の尾根線から南側へ若干下がった斜面にあたる。遺構のひろがりからみて，丘陵上には，本来，かなりの数の遺構が営まれた可能性は強い。周辺が削り取られているため，遺跡の全体的なあり方は把握できなかったが，その一端は明らかにできたと考える。最後に，時代ごとに気がついた点を簡単にまとめ，今後の参考としたい。

広石古墳群Ⅷ群１号墳

本古墳は，出土した須恵器・土師器から，６世紀後半に比定できる。また，埋葬施設は複室構造の石室である。広石古墳群の中では，複室構造の石室は，本古墳のみである。また，石室内は攪乱を受け，副葬品は散乱した状態で出土したが，鉄製の武器と馬具が出土している。とくに，馬具は，広石古墳群の中では，Ⅳ群２号墳で轡が出土しているにすぎない。馬具は，他の古墳群でも，副葬される古墳は限られており，本古墳の被葬者の性格付けにかかわる遺物である。さらに，本古墳は，南東150ｍほどに営まれた岩名隈古墳とともに，早良平野にむかってひらく谷の出口付近につくられている。石室の構造・馬具・立地から，本古墳の被葬者は，広石古墳群のなかでも有力な存在であったことがうかがえる。

このほか，古墳時代後期の遺物が，Ｃ－７・８区の段落ち部分でも出土している。図示していないが，６世紀後半の須恵器の坏・坏蓋・大甕の胴部破片が数点ある。段落ちの上縁は，ゆるやかな弧状を呈しており，該期の古墳の周溝である可能性も考えた。しかし，遺物は表土層から出土したものであり，弥生時代後期～古墳時代前期と思われる土師器の小片も混じっており，現状では決め手を欠く。

広石遺跡群Ｅ地点

Ｅ地点の検出遺構は，時期別に，縄文時代と，弥生時代後期～古墳時代前期の遺構に区分できる。

ⓘ 弥生時代後期～古墳時代前期

石棺墓・木棺墓の埋葬遺構と性格のはっきりしない土壙・ピットがある。埋葬遺構は，SR－

09以外，主軸を北西－南東にとる。これは，本来の丘陵尾根線にほぼ平行する方位である。また，例外としたSR－09も主軸は尾根線とほぼ直交して営まれており，墓地全体に一定の規則性が読みとれる。

このうち，石棺墓からは，明確な時期判定のできる遺物は出土していない。石棺墓は，棺材の組み方を観察すると，3つほどに区分できる。SQ－02・04・05は花崗岩の割石を，ほぼ長方形に整形して，棺材に使っている。SQ－04に一部みだれを認めるが，両側板は小口面を接するように組み合せている。これに対して，SQ－06・07は，棺材の上縁を蓋石が構架できるように整えるだけで，ほとんど棺材には手を加えていない。両側板には，細かい加工は加えられず，差し違えに組んでいる。SQ－06にいたっては，床面近くの棺材の隙間に，外側から小さめの板石で目張りを施している。さらに，SQ－01は，棺材に扁平な石を選ぶだけで，細かな加工を施さない。棺材間の隙間には，小さめの板石で目張を施す。両側板は差し違えに組んでいる。

北部九州では，石棺墓は，弥生時代前期・後期～古墳時代前期の例が知られている。棺材の加工や組み方からいうと，類例には，宮ノ前C地点4号石棺，野方中原，野方塚原の例と類似している。これらは，後期後半以降のものであり，本遺跡も，当該期のものと考えてよかろう。

木棺墓は，当初，土壙墓と考えて調査していたが，SR－09の土層断面を観察した際，石棺墓と同様な棺材の裏込め部分を確認した。他の2例も同様であり，木棺墓と考えた。また，出土遺物は，いずれも弥生時代終末～古墳時代初頭の西新町式～有田式土器のものである。

墓地全体を通じてみられる方位の共通性から，石棺墓・木棺墓ともに，西新町式～有田式土器の段階と考えてよさそうである。

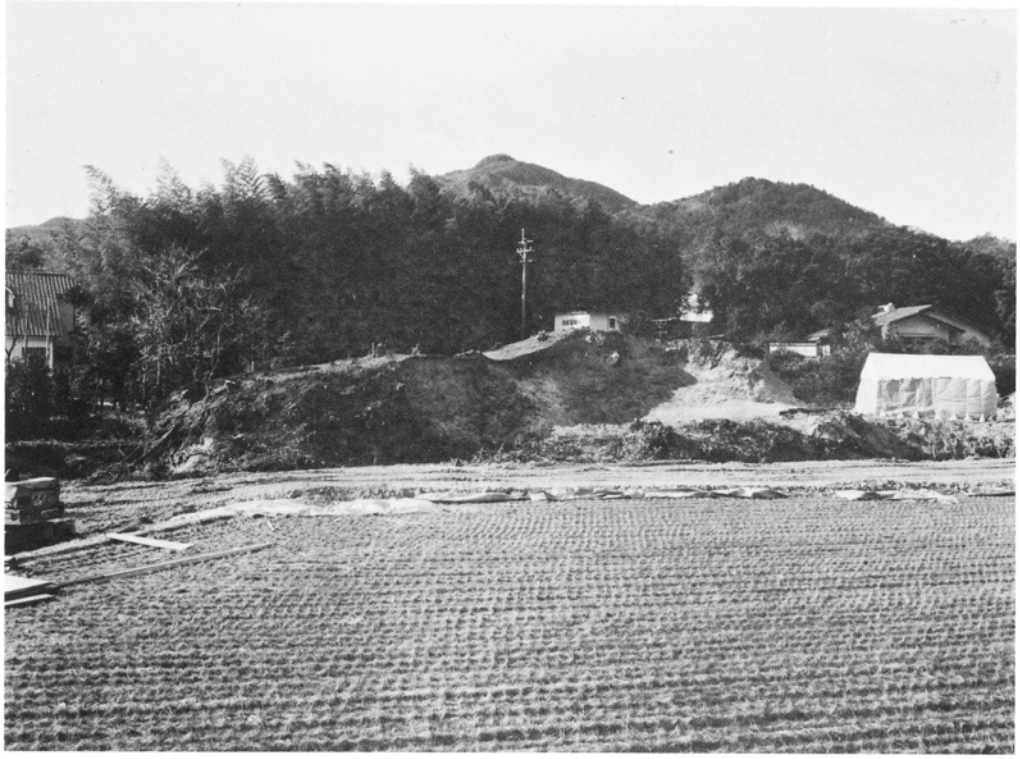
土壙・ピットは，埋葬遺構を切ったり，切られたりしている。出土遺物からみても時期的には，埋葬遺構と前後するものと言える。しかし，その有機的な関係は，調査範囲が狭いこともあり明らかではない。

ⅱ 縄文時代

遺構の埋土が，9層と同質のやや明るい黄褐色シルトであり，9層上面で遺物が出土していたため，当初，9層を縄文時代の遺物包含層と考えていた。ところが調査が進む過程で，9層は本来無遺物層で，上面が一部攪乱されたため，遺物が混入したことが明らかになった。そのため9層下半部あるいは10層上面まで掘り下げ，土壙・ピットを確認した。しかし，それらの有機的な関係は，つかむことができなかった。

出土遺物には，押型文土器・条痕文土器・撚糸文土器・塞ノ神式土器があり，前2者が主体となる。ただし，両者は遺構のなかでともなうことはない。時期差を考えてよさそうである。また，石器には打製石鏃・スクレーパーなどがある。打製石鏃には鍬形鏃があり，押型文土器や条痕文土器にともなうものといえる。

図　　版



① 調査区遠景（調査前，北東から）

② 調査区近景（調査前，南西から）

① Ⅷ－１号墳丘遺存状況（南西から）

② Ⅷ－１号墳の地山整形面の状況（南西から）

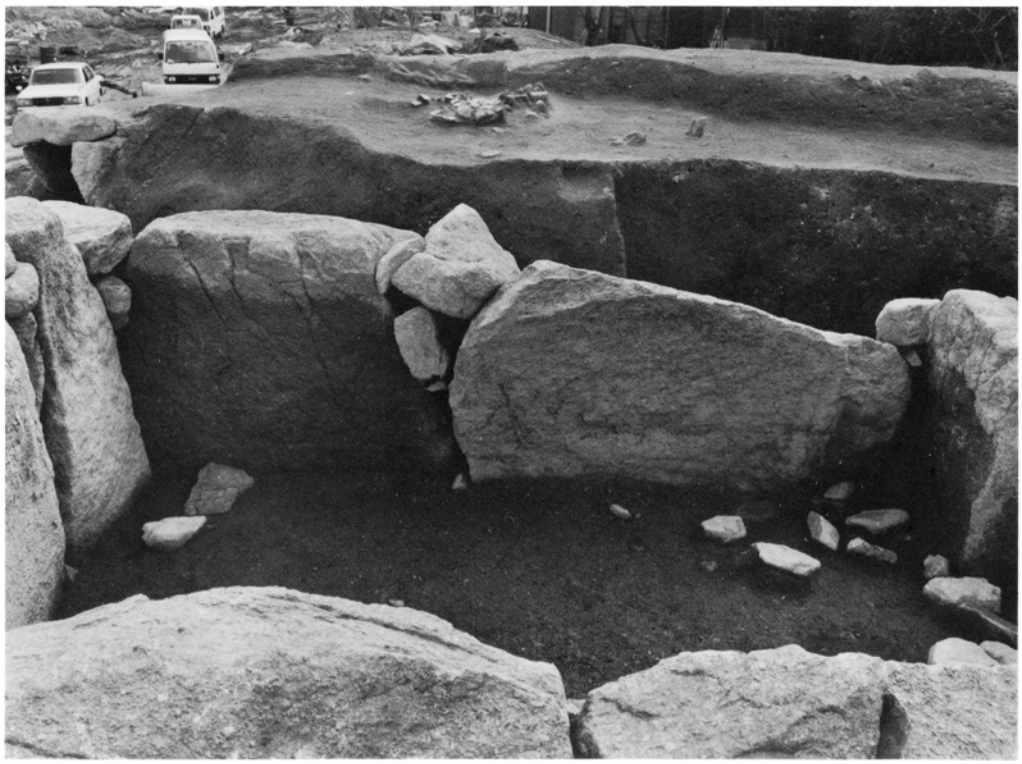
① Ⅷ－１号墳の墳丘土層断面（北東から）

② Ⅷ－１号墳の石室１（南西から）

① Ⅷ－1号墳石室2（羨道部から）

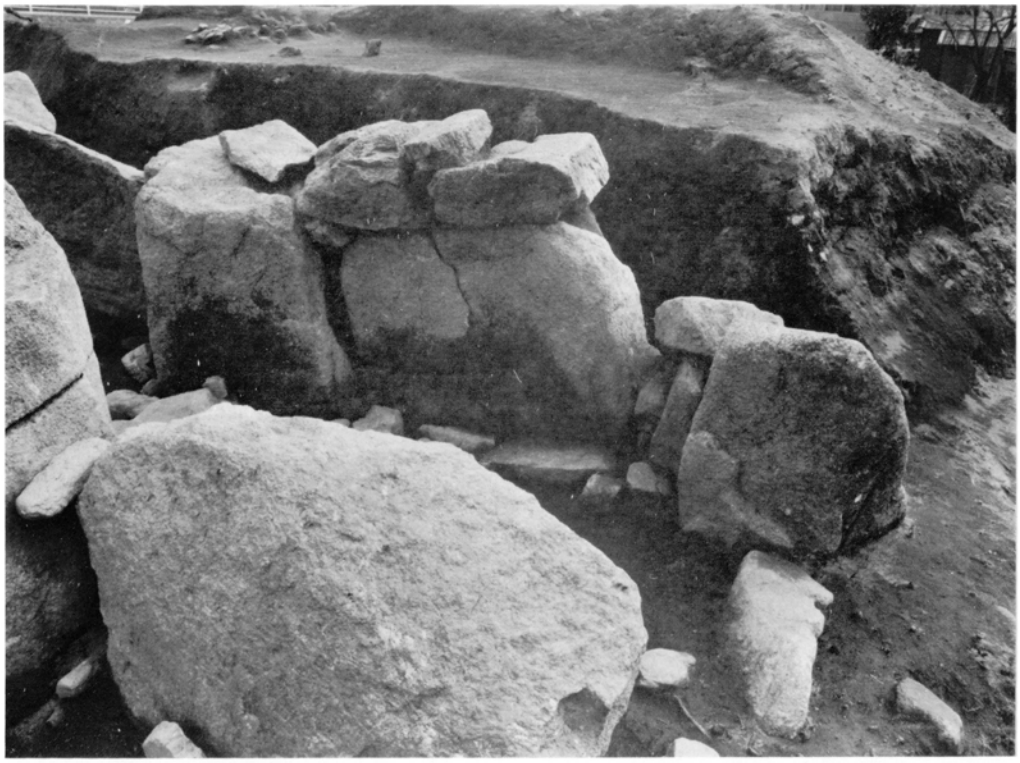
② Ⅷ－1号墳の玄室奥壁（玄門部から）

① Ⅷ－1号墳の玄室左壁（東から）

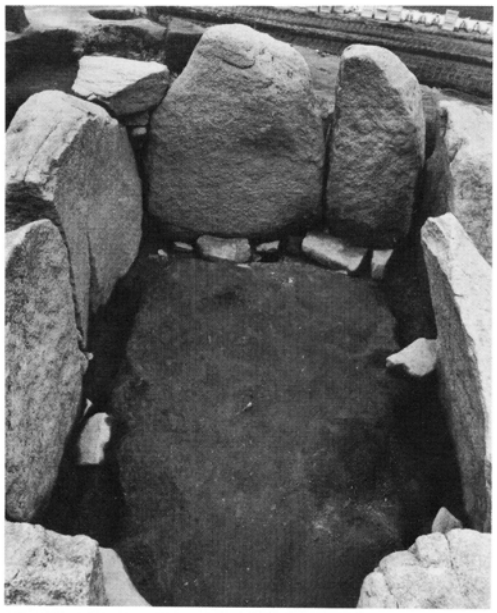


② Ⅷ－1号墳の玄室右壁（西から）

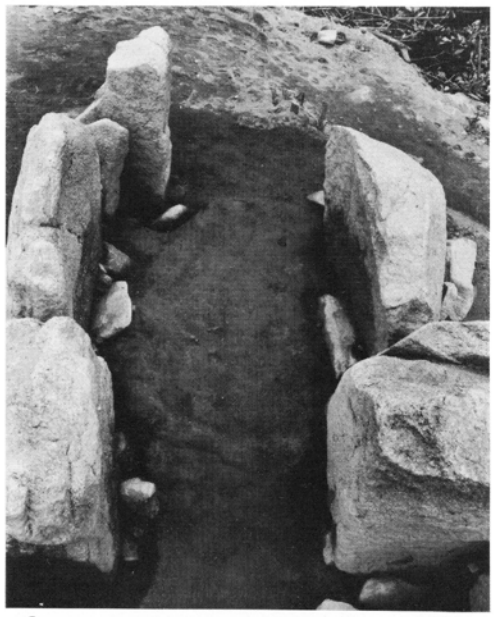
① Ⅷ－1号墳の玄室玄門部（玄室から）



② Ⅷ－1号墳の前室右壁（西から）

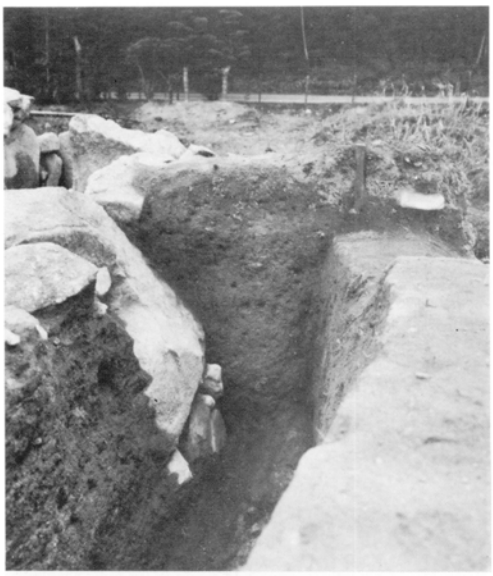


① Ⅷ－1号墳の玄室の基底面（前室から）

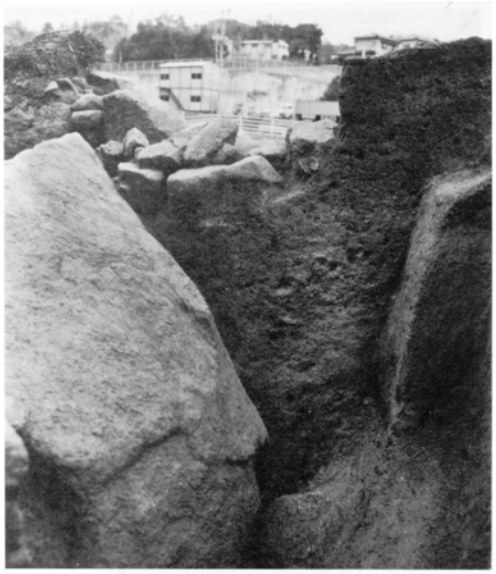


② Ⅷ－1号墳の前室の基底面（玄室から）

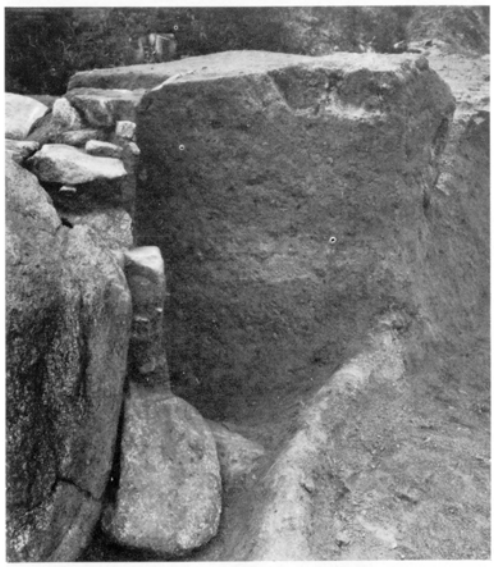
③ Ⅷ－1号墳石室（完掘後，北から）



① Ⅷ－1号墳玄室左壁の裏込状況（北東から）



② Ⅷ－1号墳玄室右壁の裏込状況（南西から）



③ Ⅷ－1号墳玄室奥壁の裏込状況（東から）

④ Ⅷ－1号墳墓壙内の供献土器群の出土状況（北から）

⑤ Ⅷ－1号墳の周溝土層断面（南西から）

① E地点B・C－3～7区の9層上面の状況（北から）

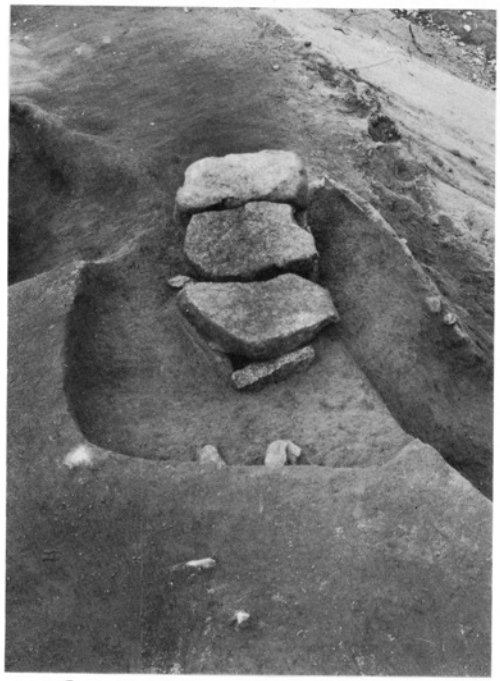
② E地点B・C－6・7区の9層上面の状況（北西から）

① E地点SQ－01（北から）

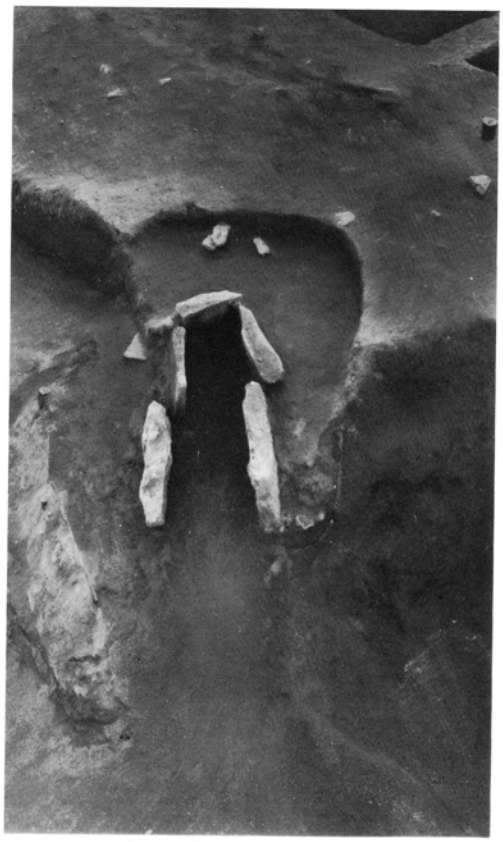
② E地点SQ－02・03（北から）

③ F地点SQ－04・05・06（北から）

① E地点ＳＱ－07崖面露出状況（調査前，東から）



② E地点ＳＱ－07検出状況（東から）



③ E地点ＳＱ－ 07 蓋石除去後の状況（西から）

① E地点SR－08
（北から）

② E地点SR－09
（西から）

③ E地点SR－10
（南から）

① E地点ＳＰ－14（南西から）

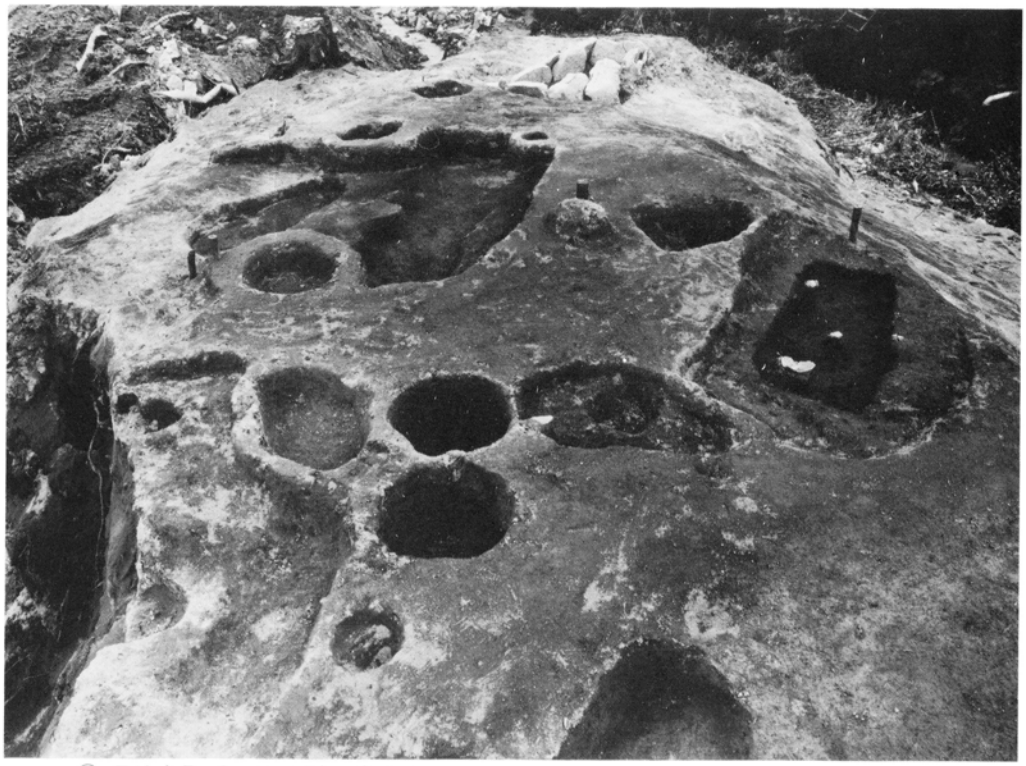
② E地点ＳＫ－13（北から）

③ E地点SK－15・16・34・35, SP－14（東から）

① E地点10層上面の状況（北から）

② E地点B・C－3～7区の遺構（10層上面，北から）

① E地点C・D－1・2区の遺構（10層上面，北から）



② E地点B・C－5～7区の遺構（10層上面，北から）

① E地点遠景（調査完了後，北西から）

② 発掘調査参加者一同

広　石　遺　跡　群

—広石古墳群Ⅷ群・広石遺跡跡群Ｅ地点—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第195集

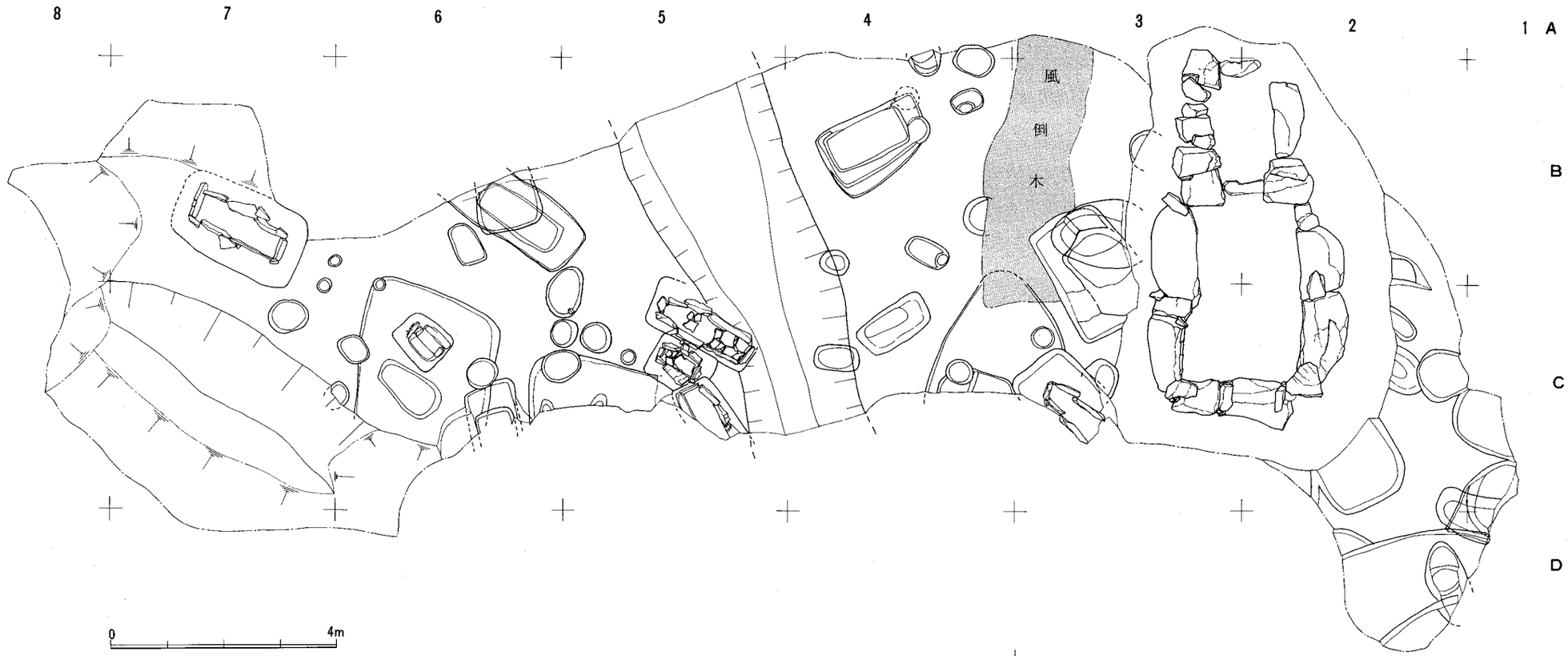
１９８９年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1丁見7-23

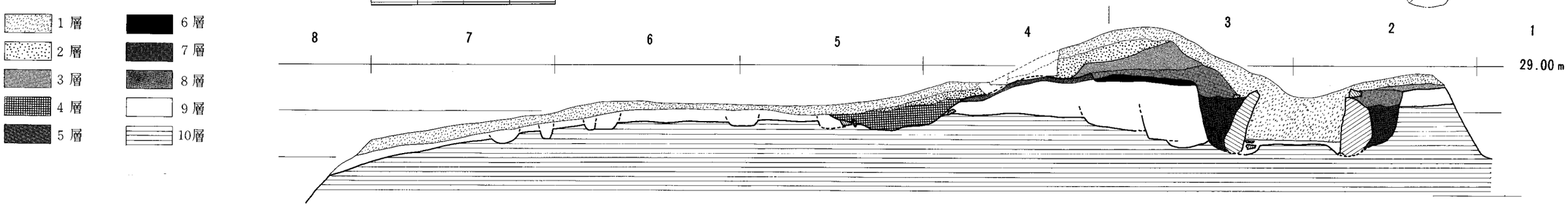
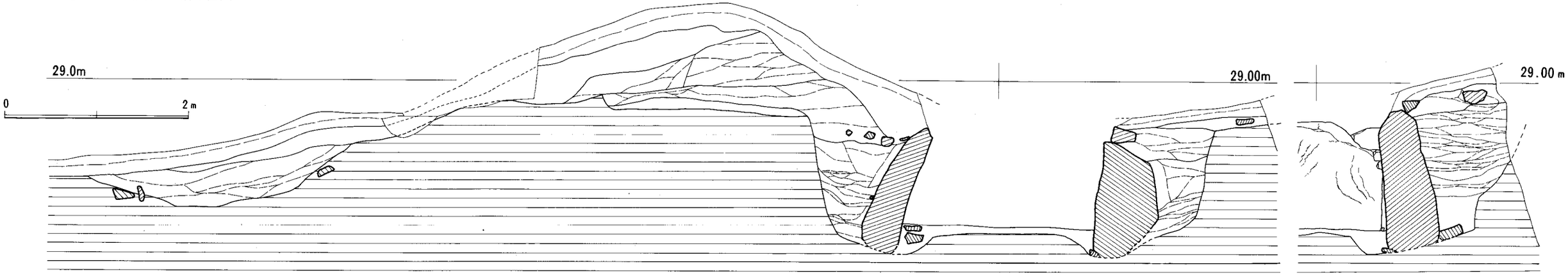
印　刷　博巧印刷株式会社
　　福岡市南区那の川1丁目9番4号

広石遺跡群付図

① 調査区遺構全体図



② 調査区土層断面図



③ Ⅷ－１号墳丘土層断面図